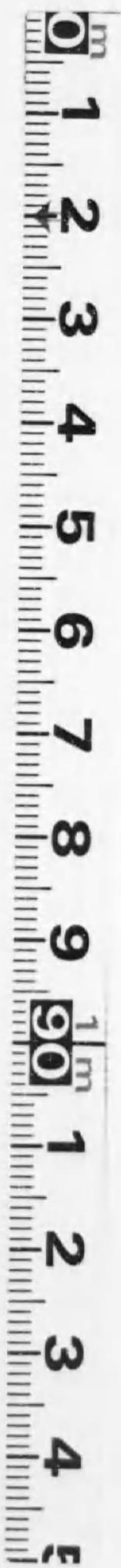


502  
254



始



1418

502-254

RENÉ WORMS

LA SOCIOLOGIE  
SA NATURE, SON CONTENU  
SES ATTACHES



社會學の本質

ルネ・ウオルムス著

田邊壽利譯



## 譯者序

社會學の始祖オーギュスト・コントを産んだ佛蘭西は、社會學の爲めに又世界第一の貢献をなしてゐる。それは此の國が、世界に於いて最も多數の社會學者を出したところである。此れ等の學者の中で最も偉大なものをガブリエル・タルド、エミール・デュルケム、ルネ・ウォルムスミナス、タルドは彼の獨創的なる模倣説を提けて立ち、デュルケムは集團的強制力の説を根據として進んで宗教學及び教育的な大研究を發表し、又ウォルムスは社會有機體説を發展させ集大成して幾多の著書を公にした。

タルドとデュルケムとはその説が相反する爲め特に多くの學者の注目を惹いたが、ウォルムスの説は右二者に比してそれ程人々の口に上らなかつた。然しながらウォルムスの社會學に對する寄與は、決して右二者に劣るものではない。

彼の思想に最も多くの影響を與へたものは、コントミスペンサーである。彼の社會學の體系はコントを繼いだものであり、彼の學說の根基はスペンサー說の發展である。けれども彼の長所は、綜合力の偉大に存する。彼はあらゆる社會學者の說を尊重し、その採るべきは、その價值あるものは進んで賞揚してゐる。一方から見れば、彼は何等特色を有せざる學者に見える。然しその綜合力の偉大こそ、彼の最大の特色である。

社會の基本的現象を、或は模倣であり、或は強制であり、或は類意識であり、或は相互作用であり、或は説く間に立つて、彼は合致である、或は説いてゐる。社會學を、或は自然科學なり、或は文化科學なり、或は一般科學なり、或は特殊科學なり、或は説く間にあつて、彼は社會學は社會的諸科學の哲學なり、或は主張してゐる。この二點は彼が特に力説するところであつて、社會學史上決して看過すべからざる點である。

彼の數多い著書の中、最も有名なものは、有機體と社會及び、社會諸科學の哲學、

の二書である。前者は彼の根本思想たる有機體說を最も明瞭に説いたものであり、後著は彼の社會學の大體系である。余が此處に譯出したものは、彼の著書の中最も小さなものであり、又最も新らしいものである。即ちその出版は一昨年即ち一九二一年であつて、其後新著の出たことを余は未だ耳にしない。本原著は、右に挙げた社會諸科學の哲學三卷を最も巧みにコンデンスしたものである。のみならず本書には、最近に發達した幾多の學說及び著書を引用し批判してゐるから、最も完全に又最も容易にウォルムスの根本思想を知り、又は彼の社會學の體系を知らんごするには、必ず第一に讀むべきものと思ふ。余は以上の觀點から本書を撰んで譯述したのである。

ウォルムスの著書は次の如きものである。

(1) De la volonté unilatérale considérée comme source d'obligations.—Paris, 1891.

(2) Précis de philosophie.—Paris, 1891.

- (3) *Éléments de philosophie scientifique et de philosophie morale*—Paris, 1891.
  - (4) *La morale de Spinoza*.—Paris, 1892.
  - (5) *De natura et metodo sociologicae*.—Paris, 1896
  - (6) *Organisme et société*.—Paris, 1896.
  - (7) *La science et l'art en économie politique*.—Paris, 1896
  - (8) *Philosophie des sciences sociales*.—Paris.
- Tome I : *Objet des sciences sociales*. 1903.
- Tome II : *Méthode des sciences sociales*. 1904.
- Tome III : *Conclusion des sciences sociales*, 1907,
- (9) *Études d'économie et de législation rurales*.—Paris, 1906
  - (10) *Les principes biologiques de l'évolution sociale*.—Paris, 1910
  - (11) *La sexualité dans les naissances françaises*.—Paris, 1912

- (12) *Les associations agricoles*.—Paris, 1914.
- (13) *Natalité et régime successoral*. Paris, 1917.
- (14) *La sociologie. sa nature, son contenu, ses attaches*.—Paris, 1921,

本原書は即ち此の最後のものである。だから書名を其儘譯せば、社會學その本質内容繁縁なるが、かくては日本名としてあまり長過ぎるから、第一篇の名だけをこつて社會學の本質としたのである。

ウォルムスの本書を譯すに就て、余は彼の學說及び著書を紹介するのみならず、又彼が社會學の爲に大事業をなした、あることを紹介しておきたい。彼は、國際社會學協會の創立以來の書記長として、國際社會學協會年報及び國際社會學評論を編輯し、又國際社會學叢書を刊行して、今尚ほ社會學の爲に努力しつゝある。社會學の恩人たる彼の努力は、社會學の亡びざる限り、全世界の斯學研究者に多大の益を與ふるのであらう。

余は此處に、余に初めてウ・ルムスの名を教へられたる恩師建部遜吾博士、ウ・ルムスの學說紹介及び批判に於いて益を與へられたる米田庄太郎博士、その幾多の大著述に於いて多くの譯語を示されたる高田保馬博士に、謹んで敬意を表したい。そして右三博士が幼稚なりし我が日本の社會學界を率ゐて今日の如き盛大を招致されたる努力に對し、深く感謝したいと思ふ。

尙又余生來の懈怠の爲に種々計畫上に齟齬を生じたるにも拘らず、校正等にまで援助を與へて本書出版の爲に最上の努力をつくされたる出版者東條英治氏の好意を感謝しておきたい。

一九二三年五月一〇日

本郷にて

壽利

## 目次

譯者序……………(一—(六)

第一編 社會學の本質……………一—四〇

- 第一章 問題の要點……………一
- 第二章 社會學は技術にあらず……………九
- 第三章 社會學は特殊科學にあらず……………一九
- 第四章 社會學は如何なる意味に於いて社會の一般的科學なるか……………二六
- 第五章 社會學は特殊的社會諸科學の哲學なり……………三六

目次

第二編 社會學の内容……………四一—八六

第六章 社會及び社會的關係……………四一

第七章 社會の基本的事象……………五〇

第八章 社會の實體……………六〇

第九章 社會契約即社會有機體……………七一

第十章 社會學の區分……………八三

第十一章 社會の成素……………九五

第十二章 社會生活……………一〇九

第十三章 社會進化……………一二五

第十四章 社會學的方法……………一四一

第十五章 社會學の理法……………一六三

第三編 社會學の繫縁……………一七—三六

第十六章 社會學と宇宙論及び生物學との關係……………一八七

第十七章 社會學と心理學との關係……………一九七

第十八章 社會學と社會的諸科學との係關……………二〇九

第十九章 社會學と社會的諸技術との關係……………二二七

第二十章 社會學と哲學との關係……………二三六

目次終

# 第一篇 社會學の本質

## 第一章

### 問題の要點

一般に諸多の科學は明に決定した對象を有してゐる。或る特殊な場合には、夫れ々々の科學の境界を定めるに際して多少の躊躇のあることは、疑ひない事實である。然しながら少くも、それ等各個の科學が普通に力を集注する點は、明確に定つてゐる。各個の科學の名稱は、總べての人々に採用されてゐる一の定義に對應するものである。

けれども社會學に於いてはさうでない。此の科學の名稱の原因となるものは、此の學の概念である。實際社會學なる名稱の下に、人々は非常に異つた多くの事



稱を了解してゐる。或る人々の如きは此の名稱が眞に科學的なる諸探究の總體を表し得ることを信ずることをすら躊躇してゐるのである。

これ等の不確定と疑惑とは一體何處から來るのであるか。その缺陷は用ひられてゐる言葉の新らしいさいふことによるのであるか。此の語の發明者はオーグスト・コントであつて、其の當時まで彼が社會物理學(註一)なる學語の下に取扱つてゐた諸研究を言ひ表はす爲に、一八四二年彼の實理哲學講義の第四卷に初めて此の語を採用したのであるが、その意味が確定するには既に永い間かゝつてゐる。然らばそれは此の語の特異なところによるのであるか。三十年前にあつては、此の語を以てラテン語の語根ミギリシヤ語の語尾から出來てゐる濫造の又雜種のものであるとして、人々は批難した。又餘り使用されない又見馴れない多くの語を用ひる時の様に、此の語に括弧を附して珍がつて用ひてゐたのである。けれども今日では、誰もかゝる輕蔑した態度を拋棄してゐる。社會學なる學語は、通常語の

中に採用されてゐるのである。よし觀念の上には互に反對であつても、少くも此の表明を用ひてゐる。

註一、社會物理學なる語はコントが拋棄したけれども、ベルギヤの學者アドルフ・ケトレは此の語を用ひて、人類學上又民勢學上の諸研究に命名した。

余の言ふ躊躇の眞の原因については後程明にする筈であるが、實際その原因は色々である。先づ社會學者達はそれに關する罪の一を彼等自身に歸せねばならない。彼等は互に一致することについて深く考へなかつた。彼等は屢々、先づ第一に各々自己の獨創力を斷言する爲に、彼等の先輩達によつて踏みしめられて來た多くの途を見棄て、又彼等の同時代の人々が進んで行つた途から離れ去つたのである。多くの人々の望んだことは、新らしい社會學の概念を齎し、それに就いて

獨創的な定義を提供しやうとするこゝであつた。局外者達——社會學に關して専門家ならざる研究者の意味での——が斯くの如き種々多數の體系の中に、混亂しか見なかつたのは當然のこゝである。此れ等の體系の創始者たる人々は、右の點に關して大部分責任を負はなければならぬ。

尙ほ他に一の因由があつて、同じ様な工合に働いてゐる。此の因由は、事實に於いて社會學から來たさいふよりは、むしろ社會學に近接する諸科學の學者達から來たものである。社會學さいふ語が出來た時、社會の領域は既に多數の研究者によつて探究されてゐた。當時、經濟學があり、道德學があり、法律學があり、又政治學があつた。いや寧ろ、多數の經濟學派、多數の道德學派、多數の政治學派があつたのである。社會學が自己の側よりして、明かな又餘り正しからざる侮蔑で、以て此れ等の諸學派を屢々遇したのであるから、此れ等の諸學派が此の新參者を闖入者であるを考へたのは、誰にも首肯されるこゝである。此れ等の學者達を社會學者達

この間に行はれた論戰は、學說上の争をば惡化させ、爲に和解するこゝが出來なかつた。社會學の爲に一の領域を探索して、何等衝突せずに以前の諸研究を發達させる様な事なくして、却つて社會學存在の一切の權利を拒んだのである。けれども人々の右の様な聲明は何等可能なる對象を有しないものであつて、確に誇大的のものであつた。

然しながらこの和解は——余は想ふ——それ程困難なこゝではなかつたのである。經濟學、道德學、法律學、政治學、別けてもオーギュスト・コントの當時に於けるこれ等の學は、社會界を是認し更にこれを指導せんと望んでゐた。即ちこれ等の科學は、余が後に説明しやうとする區分に從へば、科學さいはんよりは、寧ろ技術であつたのである。若しこれ等が科學として正しく認められんこゝを欲したのであつたならば、今尙ほ支持されてゐる一の根本的な考へ違ひは避けられたのであつたらう。すつと後に至つて、殊に主として今日に於いて、此れ等の社會的技術に對

して、總べて社會歴史の斷片たる本來の意味に於ける社會的諸科學が成立したものである。社會歴史の斷片とは、即ち經濟史、風俗史、人々が既に若干先鞭をつけてゐたもので、風俗の學なる名を附せられてゐるもの、法制史、政治制度史等である。此れ等の歴史は社會學に非常に近接してゐる爲に、社會學とは頗る密接な一の關係を有つてゐる。而して、斯くの如く接觸してゐるが故に、互に併合しやうとする熱望に根據を置く新らしい多くの拮抗が生ずるのである。然しながら彼等は少くとも相接近したことを考へてゐるのであつて、雙方共に正しい、さうすれば争は此處に一層内部的な何物かを有つてゐるのである。しかのみならず、此の論争は社會學特有の課業の上に或る種の疑惑を生ぜしめた。けれども、争が適當に導かれて行くならば、最も生氣ある又最も赫々たる光明を必ずや社會學の上に投ずることとなるであらう。

畢竟するに、社會學者は、古い社會的諸技術の代表者達を、若い社會的諸科學の主

唱者達との過失の爲に、社會學の本質決定に關して躊躇が行はれてゐるのである。批難を受けるのはその内容の細部に關してのみでなく、基礎となるべき諸多の原理それ自身、その定義又その存在の可能性、皆然りである。社會學の學徒が直ちに看破しなければならぬ非常に重要な一の要點は、確に此處に有するのである。

此の點より外に重要なことはない。色々の方面から、澤山の希望が社會學に寄せられてゐる。これ等の希望が、よし部分的にでも實現される爲には、先づ余が言はんとしてゐる多くの問題を解決してかゝらなければならない。人々は屢々信じて居た、社會學は諸多の人間社會の改善をして呉れることであらう。他の側の人々は又考へた、社會學の見解の導入によつて、當然一切の科學及び哲學を變形し得るであらう。これは何たる誇大視した考であらう。余は實際これは誇張であると思ふ。だから余自らその理由を示したいと思ふ。けれども社會學が社會の行爲及び智識の總和に對して彼の出し前を主張することが出来るといふこ

こ、又社會學が豊富なる觀念を多方面に亘つて含有してゐるこいふことは、余には確であるこ考へられる。若し人々が社會學にその有利なる役割を演ぜんこを望むならば、第一に先づ社會學の適當なる概念を明に把握して置かなければならぬ、即ち社會學の社會學たる所以、少くも社會學の社會學たり得る所以をよく知つて置かなければならないのである。余が將に試みんこするこは、此の點に關する多くの考を確定するこである。

## 第二章 社會學は技術にあらず

社會學の對象を確定する爲に必要なのは、人々が社會學に關して屢々持し來つた一の誤つた考を躊躇せず棄て去るこである。

世俗はいや學識ある人々すらも一般に、社會學はその目的として社會諸制度の改革を有し、又直ちに社會の改造を企圖してゐるこ考へてゐる。これ等の人々から見れば、社會學者は「よい意味の社會主義」を行ふ者である。こんな場合には、社會學は「社會經濟學」に殆んど同意語となるのである。

通常語が斯かる混同をしてゐる程、我々をひごく遺憾に思はしめるこは恐らくないであらう。何故かこいふに、この混同の結果、人々は社會學こいふ名を使用したり又喜んだりしてゐるからである。若しこの名が充分世間に普及するならば、それは確に、我々の貧しき人類の害惡を癒す準備をする天女をば社會學の中に

見たる考へるからである。若し社會學が科學的系列若しくは哲學的系列の一研究として現はれたに過ぎないものであつたなら、確にその成功は非常に僅少なものであつたであらう。

然しながら、最も權威ある學者達の考へた社會學の本性は、事實斯くの如きものであつたところは争ふべからざるところである。この學を建設した著名なる思想家オーギュスト・コントは、彼の實理哲學講義の第二回目以後に於いて、諸科學とその應用との間には距離の存することを主張し、そして基礎的諸科學の體統の頂點に社會學をおいたのである。彼が右の講義に於いて引續き論述し又同講義の四五六卷を構成してゐる長い發展は、全く哲學的若しくは歴史的性質のものである。此の講義では、一切の社會改造の企を彼は一時見あはせてゐる(註一)。

註一、尤もずつと後に至つて、コントは改造の企圖に達し、實理政策體系即ち人類教を創設せんとする社會學の要論 *Système de politique positive ou*

*Traité de sociologie instituant la religion de l'humanité.* を書いた。斯くて彼は社會學を政治や宗教と混同した様に思はれる。然しながら正にコントのこの態度は、彼の最も秀でたる學徒たるエミール・リットン及びジョン・スチュアート・ミルによつて批難された。即ちコントが斯くの如く、客觀的方法を棄て、主觀的方法を採るに至るや、右の二人は直ちにコントを見棄て、仕舞つたのである。

コント以後に於いて社會學の創設に最も大なる貢獻をした偉人ハーバート・スペンサーの場合も又同様である。彼の社會學は、諸多の人類社會を自然に組織立て又進化させたところの状態の研究である。諸多の事象を斯かる觀察點に集中し、分類し、それ等の自然的過程の一般的諸理法を引出す、これが彼の記述的社會學及び社會學原理に於ける彼の唯一の仕事であつたのである。その中には、何等實際上の應用に關するところが述べられてゐない。

其後の社會學者達にあつても同様である。佛蘭西に於いては、アルフレッド・アイエ、ガブリエル・タルド、アルフレッド・エスピナス、エミール・デュルケム等は、社會學に於いて或は哲學的或は科學的研究を試みたが、決して實際的のこゝは研究しなかつた。右と同じ様なこゝは、白耳義でギョイヨム・ドゥグレーフによつて、露西亞でユーヂェーヌ・ドゥロベルチーによつて、奧太利でルードウ・カッヒグム・プロウカッツによつてなされた。近頃に至つて漸く社會學が紹介された獨逸に於いては、この學はフェルジナンド・テンニース、ゲオルグ・ジムメルの二教授の諸書の中で、最初から右の特質が是認されてゐる。此の點に關して次の様な著しい事實がある。一九一〇年にフランクフルトで獨逸社會學がその第一回全國總會を開催した。その會の規約が發言者に許可したこゝは、諸多の事象を検證するこゝのみでそれ等の事象を評價するこゝではない、そして又該總會の議事録が我々に示すこゝによれば、引續いて行はれた會合の議長達は價值判斷 Werturteil に於いて眞の獲物を得てゐるが、この

價值判斷こそ、その通知に接した著者達が時々心算かに一身を捧げんことを欲したこゝろのものである(註一)。

註一、左記を参照せよ。

Robert Michels, La Société allemande de sociologie et son premier congrès, article publié dans la Revue internationale de sociologie, 1910.

Verhandlungen des Ersten Deutschen Soziologentages, Tübingen, 1911.

亞米利加では、社會學といふ語は確に永い間相並んで科學的の意義を實際的の意義を有してゐた、そしてこの二義は聊か混同して一を他の中に残してゐた(註一)。然しながら主要な社會學者達は、第一の意義を採用するに傾いてゐる。レスター・フランク・ウードが彼の純理社會學を書いたのは應用社會學を書くついで以前であつて、彼は主としてその重要を前書の方に附してゐた。ヘンリー・ギッディングス教授の社會學原理は、全々科學としての一の著述である。米國諸大學の最近の

プログラムによつて見るに、社會學は彼の地で「慈善及び矯正」を呼ばれてゐるころのものからの束縛を脱出してゐる。一語を以て言ふならば、専門學者の使用する言葉では、社會學なる語は到る處實際上の種類の意味から脱してゐるのである。

註 1. The American Journal of Sociologie, May 1916. に出てゐる Albion W. Small の論文 Fifty Years of Sociology in the United States. を見よ。

扱て右に述べたことを一の定式に歸結して見やう。日に日に愈々承認せられてゐる一種の識別は、我々に手段を供給せんとしてゐる。それは科學と技術との識別である。然しこゝによく注意しなければならぬのは、非常に古くから認められ然も非常に誤つてゐる識別、即ち理論と實地との識別と、右に言つた識別とを混同しないことである。理論は實認しなければならぬものであり、實地は實認することの出来るものである。理論は一般的且つ抽象的なる序列から來るもので

あり、實地は特殊的且つ具象的なる序列から來るものである。此の二者は斯くの如き非常に重要な一點に於いて相異つてはゐるけれども、恐らく尙ほ一層主要なる一點に於いて類似してゐるのである。二者共に行爲を目標としてゐること、即ちそれである。一は崇高なる限界に於いて、他は質實なる限界に於いて、同一の目的を有してゐるのである。或は我々の興味に準じて、或は我々の熱望に準じて、現在の世界を建設する爲にこの世界に影響を與へる、これがその目的である。——科學は更に尙ほ他の事をする。科學は實行を望まずして、單に認めんことを望む科學は、世界に一の新たな方向を與へんことを望まずして、世界が如何にして自然に方向を決定するかといふことを單に研究するのである。科學は、變化させることを考へずして、實に報告する丈である。——右によつて何人も、科學が技術と異なる點を知るであらう。技術は理想に傾き、科學は實在に傾くのである。技術は多くの律を作成し、科學は多くの理法を引き出すのである。技術は未來に影響を與

へんことを望み、科學はその探究を過去と現在との上に支持してゐる。技術は必然的に一の主觀的特性を有つこととなり、科學は純粹に客觀的たらんことを目的とする。——簡單に言へば、技術は自己を實際から區別すること、に理論の援を乞ふのである。けれども科學は理論からは出て來ない、多くの證明から出て來るのである。即ち少くも理論なる語は、實理的な諸多概念の總體を自己の中に指示するものである。——社會に關する材料に就いては、人類は永い間、諸多の實地にのみ制限されてゐた。理論と技術は、ずつと後に至つて初めて現出したのである。而して又、最後に現はれたものが科學である。進化は、人間と物理界及び有機界との間に於ける諸關係に關しては、非常に急速に行はれた。此の分野にあつては、その材料がさまで複雑でなかつた爲に、科學は直ぐ成立することが出来たのである。之に反して社會生活に關しては、疑ひもなく、永い間、歴史なる名の下に諸多事業の澤山の集積が存在してゐる、然しながら、これ等の材料を適當に科學的に組織する

ここに人々が興味を有つ様になつたのは、僅に十九世紀に至つてからである。此の興味は、少くも二個の點に於いて大なる價值を有つてゐる。第一、技術を指導する爲には科學がなければならぬ。事實人々は自己自身を完全に知つてのみ、社會に於いて巧妙に又充分に働くことが出来るのである。次に、科學はその應用以外にそれ自身で、一の高い價值を有つてゐる。即ち、科學は精神上最も高尚な希望を有つてゐる人々を満足させ、最上位に立てる人々を教育し、又人間に、彼とその周圍にゐる者との關係、總べての人々の相互依存、及び彼等の連帶を充分に意識させるものである。今日科學が非常に急速に又充分に發達したのは、斯かる事情が然らしめたのである。

社會學は確にこの大運動から發達したのであつて、この運動はこの學を成立させる方向に我々現代人を導いたのである。社會學は實地ではない、技術でもない、實に科學的序列の探究なのである。然らば正に如何なる序列を探究するもので



あるか。この序列こそ將に余が考察せんとするところのものなのである。

註一、本章で叙べた諸觀念の分析は、余の既刊の多くの著述、論文の中でなされてゐる。それは、

Annales de l'Institut international de sociologie, tome Ier にかゝびた La science et art en matière sociale なる論文。

La science et l'art en économie politique. なる表題の著書。

La philosophie des sciences sociales, なる著述、増訂版中の二章、即ち tome I, chapitre IX, 及び tome III, chapitre XI. 等である。

### 第三章 社會學は特殊科學にあらず

前章で述べたかの運動は、十九世紀に於いて、特殊的社會諸科學の一序列の成立を招致した。これ等の各々の科學は、時間及び空間を超越せる社會諸事象の一の序列の開展を觀察せんを努力したのである。それ等の中殊に著しいものは、經濟史若しくは經濟上の技術を區別されたる經濟學(註一)、風俗史若しくは道德を區別されたる風俗學(註三)、法制史若しくは立法上の技術及び判官若しくは辯護人の技術から區別されたる法律學、政治制度史若しくは政治的技術を區別されたる政治學等である。これ等の科學の外に立つて、社會學はそも如何なる地位を占めたのであるか。

註一、Leon Say の指導の下に發刊された Dictionnaire d'économie politique 中にある Science et art. 及び Fernand Faure の論文を見よ。

註二、L. Lévy-Bruhl, La morale et la science des moeurs. を見よ。

第三章 社會學は特殊科學にあらず

此の論題に關する最も簡單なる觀念は、社會學は此れ等諸種の科學が拋棄した一の領域を保持するこゝが出来たといふのである。此れ等の各々の科學は諸多の社會現象の中の一序列づゝに執着してゐるのである。けれども諸多の現象に就いて考察するに先だつて、これ等の現象を發現させる諸要素及びそれ等要素の集團に就いて何等知つて置く必要がないであらうか。斯かる次第であるから、生物學の範圍では、機能を吟味する前に、先づ器官に就いて叙述する。社會の領域に於いても同じ様に諸器官に關する一若しくは數多の科學が存在しなければならぬ。これ等の諸科學は、諸多の社會的構成、即ち社會の諸要素によつて形成される諸種の集合とも言ふべきものを記述すべきである。社會學が目的とするところは、其處に有り得ないであらうか。

この概念は、それ自身二つの方面を有してゐる。一は非常に世俗的な方面、他は非常に科學的な方面である。此れ等各々の特質に關して簡單に述べて置く必要がある。

通常用ひられてゐる語で、人々は、常に「社會事件 *la question sociale*」といふことを言つてゐるが、これによつて階級闘争問題と考へてゐる。就中社會問題 *la problème* なる語は、雇主と労働者との間に有する抗争の問題である様に思はれる。これ等二種の團體が近接して來るに、日に日に發生する小競合は別として、屢々一大争闘を演じて衝突しやうとする。この事實に關して多くの學者の注意を惹き、この事實を確め、又それを一般的理論となしたかのカール・マルクスは、多くの人々の目には、斯くの如くして社會學を刷新し若しくは創始したとすら考へられてゐるのである。

此の見解の誤れるこゝは、此處に言ふ必要がない位である。勿論階級闘争は重大なる一の事象であつて、更に々々發展して行く様に思はれる理由がある。これは緩和し出来るならば除去する様に努力すべきであらう。然しながらそれより

も一層重要なことがある。其の一は民族間の闘争である。他日階級闘争はこの民族闘争の爲に、一時忘却されて仕舞ふ様なことがあるであらう。だから、諸階級の論争と和解ばかりが一切の社會的技術を占有し得ることは言ひ得ないのである。と同様に、階級に關する叙述が社會諸科學にまつて一の重要問題であることは論を俟たぬが、然しそのみがこれ等の科學の唯一目的ではないのである。然かのみならず、この叙述は、社會集團を研究する科學の單なる一部分を形成してゐるに過ぎないのである。何故かといふに、これ等の集團中には階級の外に、種族、家族、部族都市、國家、職業、有意的協同等、即ち余が述べんとしてゐる組織の一切の様式のことにも顧慮されねばならないからである。故に社會學は階級丈を見て、他の此れ等の様式を度外視すべき理由を有たないのである。階級を詮査することは、確に教訓的であり且つ重要である。然しそればかりで社會學の全部を構成することは到底不可能であらう。

然しながら、この誤つた考の中に、正しい考の萌芽はないであらうか。よし階級のみに關する叙述が社會學でないとするも、社會學は總べての社會集團の叙述でないであらうか。若干の學者はさうであること考へてゐたし、又或る學者達は二十年前にさう書いてゐる。余が將に述べんとする概念の科學的形式もこれに過ぎないのである。社會の諸機能の檢探は、經濟學、風俗學、宗教學、法律學、及び政治學に委ねよ、社會學は自身諸多の社會形式の檢探に任ずるであらう。社會學の研究するところは、社會に於ける人間的諸要素、及び非人間的なる諸要素即ち土地、宇宙的環境、礦物種、植物種、動物種と人間的諸要素との關係である。社會學は又、その諸原理が明に示されてゐる人間的諸要素の諸種の聚合をも研究する。右の二種の叙述は、機能に關する諸科學が非常に複雑な社會生活に就いてなす叙述の基礎となり又本體となるものである。

斯かる見方、いや寧ろ説明の仕方は、少しも誇張ではない。社會的諸要素及びこ

れ等諸要素の集團に關する或る種の研究を既に諸科學が創始したといふこと、そしてこれ等の科學から右の諸研究を奪ひ取らうと主張し得ないといふことは、何人も認めることである。此れ等の科學の中で可成り古くからあるものが二つある、諸種族の研究たる土俗學、人口及びその小部門の研究たる民勢學がこれである。此の外に非常に新らしいが然かも非常に有力な一の科學がある。この科學は、人類地理學若しくは社會地理學なる名で知られてゐるものであつて、その研究は人間と「テラ、酸」の環境との間の關係である。此れ等の研究全體に關しては、何人もそれが全々社會學であり得ないことを知つてゐる。事實又機能に關する諸科學は、右に社會學なる名を附せざるを以て正當であるとした。斯くて人々はこの研究全體に對して新らしい一の名を制定した、即ち社會形態學がそれである(註一)。これによつて人々は、右の研究の總體が單に一の特殊的社會科學を構成するに過ぎざるものであることも認めた、そして又人々は、總べての偉大な社會學

者が本能的に社會學といふ語に出来るだけ廣義の意味を賦せんことを欲してゐたといふことを知つたのである。人々がかく認めたことは當然である。宇宙學及び生物學が一切の物理的自然の上に又一切の生物的・自然的・光明を投じてゐるに同じ様に、社會學は一切の社會的自然の上に光明を投じなければならぬのである。社會學の創始者オーギュスト・コントが社會學について考へ又或る程度まで成立させた理由は、實に此處に存するのである。此の科學の爲に發見された名稱は、よし如何程有益な研究であつたにしろ、此れ等の研究の中の一のものによつて獨占されてはならない。社會學は、諸多の特殊的智識の中にその地位を占めてはならないのである(註二)。

註一、L'Année sociologique の中に社會形態學といふ名が選定されてゐる。

註二、余は余の Philosophie des sciences sociales, tome Ier, Objet des Sciences sociales, chapitre X et XI. に於いて一種の論理上の順序に従つて、諸多の特殊的社會科學の系列を整理せんことに努力しておいた。

#### 第四章 社會學は如何なる意味に於いて社會の 一般的科學なるか

余は社會學が社會的技術でもなく、又特殊的社會科學でもない、といふことを説明した。さうした結果、社會學は唯一のもの以外にあり得ない、即ち諸多の社會に關する一般的科學としてより以外にあり得ない、といふことになつて來る。此の點に關しては、余はオーギュスト・コントの思想を忠實に墨守する者である。然しながら、彼の創始したこの科學は其後非常に發達した。その發達につれて、諸多の新らしい問題が生じて來てゐる。だからコントの時代にはそれでよかつたか知れないが、余には全體に亘つて定義を下すことには最早満足出來ない。それに多くの精密を與へることが必要である。

實際前に述べた定義は、二種の異つた意義に解することゝ出來る。社會學が社

會に關する一般的科學であるといふ時には、この學は統整的科學であること解されもするし、又社會の一般的方面の科學であることも解される。此の二個の概念は孰れも、その存在の理由に、これ等の見解に對する賛成者をも有してゐる。

エミール・デュルケムは、右の中第一の方を認容してゐる。彼に従へば、社會學は一の組織即ち社會的諸科學の合體であるのみであり、又ある得るのみである。(註二) 實に此れ等の社會的科學は、社會學の各成員なのである。社會學年報 *L'Année socio-logique* の各卷に就いて見るならば、何人もこれ等の科學が右の如く取扱はれてゐることを知り得るであらう。だからして此の年報には、宗教社會學、道德社會學、法律社會學、經濟社會學と呼ばれるもの、最近の研究が色々載つてゐる。即ち、宗教學、風俗學、法律學、經濟學等は、社會學の斷片として、即ち當然諸多の共通原理から啓示を受けなければならぬところの斷片として考へられてゐる。社會學は、此等の斷片の並存及び統整によつて構成される、即ち社會學は此等從屬的要素の合體

なのである。

註一、E. Durkheim et P. Faconnet, *Sociologie et sciences sociales*, article insé é dans *la Revue philosophique*, mai 1903, page 465.

次に第二の概念について述べやう。此の概念に従へば、右に述べた様な諸多の科學は、各々その獨立性も多くの著しい特性をも有つてゐる。宗敎學は法律學とは非常に異つて居り、風俗學は經濟學とは非常に異つてゐて、それ等を同一名稱に順應せしむることは到底不可能である。故に此れ等の科學は、その發端より異つた研究者達によつて探究されねばならない。科學に於ける分業の必要は、此處に存するのである。けれども、此れ等の科學が接近する爲には場所が必要である。元來、此れ等の各々は社會の實體の多方面の一を採つて研究してゐる。此れ等の科學が獨立に各々の研究を出来るだけ發展させた時には、それ等の結果を比較し

又結合して、夫れ々々の斷片を檢探した各個科學の總和に關する一の觀念を作らなければならぬ。これ正に社會學の任務である。故に社會學は、自己の中に諸多の特殊的社會科學を吸収するのではなくて、寧ろそれ等の科學の一般的冠頂 *Couronnement général* として現出するのである。社會學は決してそれ等の建築ではなくて、それに就いて單に共通の屋根を造つてやるのである。

以上に述べた二種の概念の中、孰れを採用すべきであるか。それを撰擇するに先だつて先づ論争を限定するここが正當である。實を言へば、右の不一致は全く些細の事から來てゐる。デュルケムは、諸多の特殊社會學に並立さして、多くの一般的結果の研究に對して一の地位を與へ得るさいふことを、必ずしも否定するものではない。此の點に關して、適當な多くの言明をしてゐる。彼は言ふ、社會的諸科學が充分に發達した時、其れ等の中に包含されてゐる最も一般的な諸多の關係を抽出す爲に、各個科學によつて獲られた結果を接近させる場所が必要であるこ

いふことを簡単に會得することが出来るなら、斯くの如くして提出された問題は、確に不可解なものではない(註一)也。又他方第二の概念に於いては、特殊的社会諸科學の夫れ々々の學者達が、自己の科學に接近せる諸多の科學を對象とする一の六なる智識を獲得し、此れ等諸科學の進歩の流れから援けをかり、自家の多くの研究に於いてそれ等の科學の材料から刺戟を受け、此れ等の科學に自身を委ぬる同輩に自己を結びつけることの連帶を認める、即ち一言にしていへば、宛もこれ等一切の他の科學を自家の學を統一するのに適當な様に振舞ふ、ことが有利であるといふことは當然認めるのである。この統一が理解されるならば、右の二種の概念の相違は、大抵術語の上の差異に歸結する。デュルケムによれば、社會學は社会的諸科學の總體 *le total* である、若しこれ等社会的諸科學の總和の結果の研究名稱を附したければ、それは一般社會學と呼ばるべきものである(註二)。今一つの概念に於いては、社会的諸科學は原則として各々獨立せるものであり、又此れ等諸科學の

總和の結果を檢究するものは社會學である。そして、必ずしも社會學なる名に一般を表はす品質形容詞を與へなくともよい、何となれば社會學なる名自身で當然其の意味を含んでゐるからである(註三)。

註一、前提論文、四七七頁

註二、この最後の名稱を有つた一の題目が *L'Année sociologique* の中にある。

註三、故に二方面に用ひられた言ひ表は、その一致の表は次の如きものとなる。左方がデュルケムのものである。

諸多の科學社會學 = 諸多の科學社會學。  
 一 諸科學社會學 = 社會學。

斯くの如く右の論争は結局言葉の上の問題に歸着するのであるから、恐らく何れが正しいといふことは出来ないであらう。言葉の上の定義は自由ではないだらうか。けれども、學語に關して大事なことは、我々がそれに關して何れを撰むかといふことを示さなければならぬと考へるここである。我々は、社會學にまつ

て明に有利であるところのものから撰擇をする。實際に社會學の繁雜を惹き起す多くの大障碍の一は、多數の専門學者が社會學に反對するところの妨害から來てゐる。彼等は實際自家專攻の研究が社會學に吸収されるであらうといふことを恐れ、社會學の侵略的傾向に對して警戒してゐるのである。此の種の恐怖は、諸多の社會的技術に關する限りに於いては何等根據あるものではない、何となれば、社會學は諸多の應用を少くも直接には自ら控えてゐるからである。此の恐怖は、特殊的社會諸科學の學者達に於いては、さらに大なるものがある。著名な經濟學者たるエミール・ルバースールは、多くの新思想に賛成しつつ、もそれ等の全部を必ずしも採る必要がないと信じてゐる人であるが、彼が社會學者達に向つてなした有名な演説に於いて、右の様な恐怖の感情の反響を傳へてゐる。社會學者達によつて國際社會學協會一九〇六年度の會長に選ばれた彼は、ロンドンに開かれた該協會第六回總會に於いて開會の辭を述べた際に、法外の抱負を有たぬ様に社會

學者達に警戒した。開會の辭を結んで彼は言つた、勸告する、社會學者達が謙遜である様に（註一）。現在の場合に我々が注意すべきは、この謙遜の感情である。余は信ずる。社會學がその大望を制限するならば、一層よく認容されるであらう。社會諸科學の總體たることを斷念するならば、それによつて社會學が必ずや和解し得るであらうといふことを何人も認めるであらう。若しも社會學が特殊社會諸科學の獨立を威嚇しないならば、これ等の科學は何も社會學の生存權を否定しないのである。相互の譲り合ひによつて各々の領域は總べての科學の利益を最もよく劃定し、又科學それ自身の利益をも確定するのである。限界を知ることは相當價值あることであるが、然し又相當の利益もある。若しも此れ等近接の諸科學と共に平和を樂み、又これ等と同盟せんことを欲するならば、社會學は右の様にしなければならぬのである。故に我々は、夫れ々々の領域を踏み出さぬ様に、又それから飛躍（survoler）——若しか、る字を用ひ得るとするなら——しない様に



努めやうではないか。結論して言ふ、社會學を定義して社會諸科學の總體であると言はずに、これ等諸科學の綜合であると言ひ度い。

註 1. Annales de l'Institut international de sociologie, tome XI, 1907, page 64

## 第五章 社會學は特殊的社會諸科學の哲學なり

余が社會學に關して認めんとする特質よりして、明にならねばならない又前述の諸研究の決論となるべき結果が生じて來る。余は言ふ、社會學は特殊的社會諸科學を支配する。換言すれば、此れ等諸科學は社會といふ一の世界を分割し、社會學はそれ等の中に統一を再建するのである。故に此れ等諸科學は各々特殊なる對象を有し、社會學は一段高い見地よりして此れ等の對象を總べてに亘つて凝視するものである。更に分り易く言へば、此れ等の科學のみが眞の意味に於ける科學であつて、社會學は寧ろこれ等諸研究の哲學である。斯くて余は余の探究の結果として、社會學を以て、特殊的社會諸科學の哲學を構成するものである、と定義するのである。

此處で、哲學と眞の意味に於ける科學とを區別するところの特質を羅列するこ

こは不必要である。これは既に幾度も試みられてゐる。一種の實理哲學に關してすらも、何人も知つてゐるこは、純理科學の諸研究の一類があるこいふこである。オーギュスト・コントは、實理哲學講義の第二回目(既述の)に於いて、そのこを特に主張してゐる。右の二類の異なる點は綜合と分析とにある。科學は特殊的な多くの事象を認め、そしてそれ等を理法の形とする。けれども、主要な問題は哲學の領域に屬してゐる。一の科學の哲學は、その科學に關する最も一般的なる問題を取扱ふ。それ等の一は起首に於ける問題であり、一は究竟に於ける問題である。科學の第一歩に於いて先づ確定しなければならぬものは對象及び方法である。科學の終極に於いてなすべきこは、多くの結果の摘要である。此の考を今の場合に當てはめるならば、社會學はその統一の課業を遂行する機會を二度有してゐるこが分かる。基底に於いて、社會學は各個の特殊的社會科學の爲にその範圍を指定してやり、そして此れ等の科學が用ふるこの出來る諸多の方法を

指示してやるのである。斯くの如くして、社會學は自然に此れ等諸科學を互に結びつけてゐる。何こなれば、それ等の範圍を確定するこに於いて、社會學は一方には有らゆる空隙の生ずるこを避け、他方には有らゆる二重の仕事及び有らゆる侵蝕を避けるこに努めるからである。そして又それ等の方法を確定するこによつて、社會學は各個の特殊的社會科學に對して總べての經驗をなし得る様に便宜を與へるこに盡力し、或一つに向つて成功した方法が如何にして他のもの、使用に適合し得るかこいふこを示してゐる。又冠頂に於いては、此れ等特殊科學の結果を統一し、斯くて社會學は、研究上の必要よりして一時分離してゐた社會實體の諸方面が如何にして再び結合し又如何にして實際生活の中に連結するのであるか、社會の一切の要素が如何にして協合してゐるのであるか、社會學の一切の機能が如何にして成就されてゐるのであるか、進化の一切の階段が如何にして繼續し又連絡してゐるのであるかこいふこを示してゐる。故に社會學は

此れ等二個の繼起的機會に於いて、我々が社會學のものとして認められた綜合的作用を正に行つてゐるのである。

然しながら、此れ等二個の機會を明に區別することの出来る點が果してあるであらうか。理論上に於いては、正にあり得る。然し實際に於いては、餘り多くない。只一の理想的見地に立つて、我々はそれを鑑別することが出来るのである。若し社會學的諸科學の成就したる作業を想像するならば、其れ等の各々に一の序論と結論とをつけ、又此の序論と結論との間にそれ等に應ずる丈の一般社會學の諸章を見るのは、論理上當然であるけれども、此の社會學なる大建築が未だ殆んど造られてゐないといふことは述べる必要がない程である。この建築が未だ全く成らざる以上、該建築の總べての部分と同時に造り上げなければならぬ。科學の本體、序論及び結論は斯くて相並んで協力するのである。斯くの如くして社會學は特殊的社會諸科學と同時に又同程度に出來上るのである。非常に奇怪に考へら

れるかも知れないが、起首に於ける又究竟に於けるこの二種の作用は、同時に實現することゝなる。従つて余は、後に述べんことする場合に、右の二者をあまり分離しない様に警戒したいと思ふ。

余が次に示さんとするところは、既に成された多くの研究が一の實際的價値を有つてゐるといふことである。余は既に抽象的概念に於いて、社會學の有する任務を決定した。今や余は、具象的概念に於いて、社會學が如何にその任務を遂行してゐるか、若しくは少くともその任務を遂行せんことしつゝあるか、といふことを明にしたいと思ふ。扱て社會學が今迄になし來つたことを明瞭にするには、如何なる多くの結果を社會學が記録したか、といふことを示せばよい。勿論、余が本書に於いて示さんとするところは概略に過ぎない。といふ譯は、人々は本書に於いて、余から社會學の全き取扱を聞かんとするのでないからである。然しながら少くとも

何等かの形に於いて同じ様な取扱の概略を整へ、そして主たる系列の若干を述べて置かなければならない。社會學の論理上の對象を示した以上、余は社會學の實際上の内容をなしてゐるまゝころのものに就いて述べて見たいと思ふ。

## 第二篇 社會學の内容

### 第六章 社會及び社會的關係

知覺し得る宇宙を構成してゐる實在の總體は明に三箇の大なる範疇に分つことが出来る。無機物、生物、及び社會、之である。かくてこの總體は三箇の分野を形作つてゐる。即ち夫れ々々無機界、有機界、超有機界、ま呼び得れらるまゝころのものが之である。此れ等の分野は、或る點に於いては並存してゐるものではあるが、又最も重要な見地よりすれば互に重なり合つてもゐる。何まなれば、超有機界は有機的諸要素から出來てゐるものであつて、丁度有機界が無機的諸要素から出來てゐるのま同一だからである。此れ等の各が有する特色は、何れもその前者に於

いては知るこゝの出来ない配列の方式を有してゐるこゝである。各々は前のものから材料を採りつゝ、一の新しい形態を有してゐるのである。

右の中で特に社會界と生物界とは如何なる關係を有してゐるか。最も一般的なる意義に於いては、その關係は次の如きものである。社會界は生物界の一面である。先づ諸多の有機體は二種の關係を現はしてゐる様に思はれる。即ち同一有機體を構成してゐる諸部分間に於ける内的諸關係、及び諸種の有機體間に於ける外的諸關係、即ちこれである。第一のものは生物學の對象とするこゝろである。第二のものは社會學の對象とするこゝろのものである。

余は實際屢々此の區分を採用する。今から明に本質的に此の區分を構成してゐるこゝろのものについて述べて見たい。内的即ち有機的諸關係は、原則上無意識的のものである。之に反して、外的即ち社會的諸關係は、原則上意識的のものである。生物は孰れも一種の表現をなして居り、又この知識によつて彼等の外的活動に導かれてゐるのである。

右の如く定められた原理は、直ちにその應用を見出さんとする。有機界と社會界とが同一の外延を有つてゐないといふこゝろは、實際に認めるこゝろが出来、何れの點よりするも社會の範圍は有機界の範圍より大なるものではない。社會は單に生物間に存在してゐるに過ぎぬ。星の社會、原子の社會、なごいふも單に比喻に過ぎないのである。然し之に反して、社會の範圍は多くの點に於いて有機界の範圍よりも小である。これに關しては、今少し精密に言つておく必要がある。

先づ第一に、眞正の社會を構成してゐない生物の種類が澤山ある。植物がそれである。勿論、これに關しては反對のこゝろも屢々主張された。人々は、或る異種の二植物の、或は同種の多數植物の、或は又異種の多數植物の集團中に、社會を見出さうと試みた。第一の場合には菌及び藻のそれであつて、これ等は並存して一の地衣を構成してゐるのである。第二は樺、松、椈の場合であつて、その集團が一の森林を

なしてゐるのである。第三の場合は、假令我々が、一の森林に於いて彼にその外貌及び名稱を與へるものが優力な種の植物だけであるといふこと、然し優秀なもの、蔭に生えてゐる丈の低い又從屬的な多種の植物も又その森の中に入つてゐるといふことを考へるにしても、結局第二の場合に基くものである。庭園の如きは非常によくこの第三の植物社會の類型として與へらるべきものであらう。

如何にも此れ等諸種の對象に關する面白い植物學的研究の材料となるものがある。これ等の植物間に於ける近隣の植物が有つてゐる關係は、彼等の各々に實際影響を與へてゐるし、又彼等の有機的の生活の上に反響を與へてもある。けれども此れ等の諸關係を支配してゐる原理は、各々の種が近いといふことである、そしてこの近いといふことは物理學的若しくは生物學的諸原因で説明出来る。土地及び氣候が植物に及ぼす影響を研究する植物地理學があると同じく、植物が相互に他に及ぼす影響を研究する植物環境學なるものがあり得る。然しながら、植物

社會學といふことは、少くとも尙早であらう。

有機體の系列に於いては、植物の上に動物がある。此處で我々は、眞正の社會の發現を否定することが出来ないのである。この事實は遙の昔から認められてゐたのであつて、澤山のそして又深奥な研究を生んだ。アルフレッド・エスピナスの「動物社會」いふ有名な著述は、右に關して貴重なる綜合を與へてゐる。其後に書かれたものは、單に右の書のデテールを附加してゐるに過ぎない。余は又此れ等の集團の中で理智的動物に屬するものが眞に社會的特性を有つて居り、その特性は理智的動物以外のもの、集團に於いてはあまり明瞭でないといふことを主として明にしたいのである。だから管狀水母類にあつては、假令分業が遙によく行はれてゐるにしても、それを以て社會と呼ぶことには躊躇するのである。又複合生の海鞘類が驚くべき協同をしてゐるにしても、それを社會と呼ぶことには、同様に躊躇する。此れ等二種の生物は複雑な有機體と呼ぶべきで、社會とは考へられ

ない。膜翅類の集團、蟻塚、蜂の巢等、魚の集團、鳥の集團、及び哺乳動物の群聚に於いては、これと異なる。何人もこれ等をば社會と呼んでゐるのである。解剖して見るならば、この場合と先の場合との間に一の重大なる差違の存するところは疑ふべからざるどころである。この場合には、我々は孤々の有機體を目的あたり見るが先の場合では合生してゐる有機體を見るのである。のみならず、それと同時に、其處に重大な一の心理的相違が存する様に考へられる。この場合ではその各個體が、共通に追求する一の目的の何等かの表現を有つてゐる様である。然し、先の場合では、そんなものはない様に思はれる。故に結論すれば、理智の存するところに社會が発現するのである。

偕て然らば、人類はさうであらう。人類の間では、社交性が十分に擴がつてゐる。ここが明である。存在してゐる一切の社會の中で、人類社會こそ、まぎれもなく最も我々にまつて利害關係のあるものである。人間社會の中で、如何なる社會が他

の何れの社會よりも我々に利害關係を有するのであるか。この點に關しては、相反する二種の思想がある。オーギュスト・コントによつて取扱はれた初期の社會學は、主として優秀なる人間の集團を研究した。彼の目には、西歐の諸國が殆んど唯一の價值あるものであつた。英國の偉大な人類學者達や民俗學者達から刺戟を受けたエミール・デュルケムの學派にまつては、先づ研究さるべきものは原始的人類である。兩者が夫れ々々の概念を支持するには、確かに根據を有つてゐる。デュルケムの信するところは、後の發達を理解する爲には、諸多の制度の起原を知らねばならないといふことである。この議論は、實際争ふべからざるものである。然し、コントは答へるであらう、有史以前に引籠ることは全く無益のことである。人類が社會學に要求するところは、人類の現状をよく會得して後に來るべき状態に對して合理的に準備し又組織立てるにあること。この言も亦彼にまつては充分根據のあることの様にかへられる。相反する二個の提論は、ライブニッツに言を

籍りて言へば、兩者が肯定するこゝに於いて眞であり、兩者が否定するこゝに於いて偽である。こゝいふこゝが眞理の様に考へられる。人類社會の起源を研究するに共に、現狀をも研究しなければならぬのである。然し余の考では、現狀の研究の方が一層有益であると思ふ。現狀の研究に必要な材料は、より豊富であり、より複雑であり、より高級である。この材料は又、一層直接に實際上の利害關係を有つてゐるものである。しかのみならずこれは又、一層確な智識の材料を供給して呉れる。何となれば、第一、現在は檢證するこゝが出来れば、過去は現形に復するこゝが出来ないからである。わけても又、現在は我々が直接に理解するこゝが出来、こゝいふ譯は、現在に生存してゐるものは、餘程我々自身のものに近い行爲の動機及び思考の方式を有つてゐるからである。過去に於いては、殊に非常に遠い過去に於いては、その心の機械的構造が現在我々の有つてゐるこゝのそれと非常に異つてゐる。實際に於いて、右の論争を左右する心理的考察はこの點に存する

のである。現代に存する諸多の大社會は、科學にまつて、總べての中で最も教訓的のものである。その主たる理由はこの大社會が我々の精神に最も滲透してゐるこゝいふこゝである。



## 第七章 基本的社會事象

社會學の取扱ふ材料が諸多の生物——殊に人間——間に於ける色々の關係であることは既に述べた通りである。然しながら右の提言は確定して置く必要がないであらうか。此れ等の關係の本質即ち特質を構成してゐる一の基本的事象を特に引き出すここが出来ないであらうか。これは幾度も試みられた、そしてその結果二個の體系が生まれた。この二個の體系は約二十五年前から主として佛蘭西に於いて社會學者間に論議されて來てゐる。その一はガブリエル・タルドの體系である。他の一はエミール・デュルケムの名に結びつけられてゐるそれである。先づ右の問題に關する此れ等兩學者の態度を簡單に述べて見やう。然る後に、余自身の考を示したいと思ふ。

タルドの學說の原理によれば、社會は同類者の間にのみ存するのである。諸成

員の類似は、共同生活の基礎であると同時に、手段であり、終局である。何となれば、共同生活は或る種の原始的類似を豫想し、そしてこの類似は一の最も完全なる共同生活を實現する爲に役に立つからである。然らば如何にしてその類似が成立するのであるか。それは模倣の機械的構成によつて成立する。自ら類似してゐることを認める諸生物は、彼等の間に於いて模倣する。模倣は最初は一方的である。即ち劣者は優者を模倣する。模倣は次に相互的となる。即ち優者も劣者から何物かを借りる。模倣は内部から外部へ行く。こゝで言ふ意味は、模倣者が彼の眞似た理想を採用するのが諸多の行爲をなす前であるといふのである。これがタルドの定めた模倣の理法である。この過程の發達について彼の考へたところは、人間が類似の可能なる最大限に達するといふことである。各個人がなす發明は、全集團を通じて流布する。新らしい思想、巧な又有利な方式は、傳播し、そして是認される。發明し模倣しによつて、我々は人類の歴史を悉く作り上げたのである。

即ち社會は一の織物であつて、その緯<sup>ヨコイト</sup>をなすものは發明<sup>クライト</sup>、經<sup>タテイト</sup>をなすものは模倣である。

右が少くとも、最初の又最も重要な彼の著書模倣の理法の中で述べたタルドの學說である。後に至つて公刊したそして彼の思想の全發展を約述した一小著社會理法に於いて、彼は少しく違つた事柄を發表してゐる。此の著に於いては、彼は人間行爲の主たる三様式を區別してゐる。反覆、反對、應化、これである。然しながら彼自ら言つてゐる通り、社會に於いては反覆は模倣であり、反對は反模倣であり、應化も亦少くとも一部分一種の模倣である。故に我々は、此れ等三様式の各個の根柢に於いて、模倣の過程を見出すこゝが出来るのである。タルドが此の書で述べた考が前書に述べたのミその形式に於いて同一のものに過ぎないならば、その根柢に於いては何等の變化をもしてゐない譯である。あらゆる場合に、彼は、人間間の基本的關係は模倣的關係であると言つてゐるのである。

デュルケムの學說は、直接にはないけれども、タルドの學說に反してゐる。デュルケムの説は、事實上、タルドのミ同一の領域にはきちんミ當てはまらない。タルドの探究は、社會的諸關係の内的本質であり、デュルケムのそれは、單にその外的特質である。前者は形而上學者であり、後者は純粹の科學者たらんミしたのである。デュルケムが單に望んだこゝは、外部から社會の諸現象を認めるこゝの出来る標準を發見し、それによつて社會的諸現象ミ純粹の個人的諸現象ミを區別しやうミしたこゝである。社會的なる事象は、社會の壓力の下に行はれるこゝろのものである。我々の信仰、我々の行爲の様式は我々に固有な働きては<sup>ない</sup>。我々は、これ等のものが既に我々の環境の中に形成してゐるこゝを發見し得る。我々は他のものを採用するこゝに於いて自由ではない、何ミなれば、かくするこゝは社會集團の外に我々を逐ひ出すこゝになるからである。宗教、法律、風俗等は、集團が我々に壓しつける此の強制の夫れ々々の形式である。強制的この型は、我々のあらゆる行爲の

上に置かれてあるが、これは非常に幸なこゝである。何となれば、我々はそれによつて我々も同質なるものに結びつき又それ等の活動から益を享けてゐるからである。パスカルが言つた通り、我々の屈従は同時に又我々の偉大なる。斯くて都市は、現代の社會學者から見れば、古の信者に見えたこゝの神性として見られるのである。 *In ea movemur, vivimus et sumus.* これなしには人は説明もされず又考へられもしない。

以上二個の學説は、確に一致するこゝろがない。社會事象に於いてタルドの見たのは、人間が自己の近隣にある一の典型に對して自由に粘着するこゝろである。デュルケムが其處で見たのは、集團がその構成要素の上に及ぼす強制力である。余は次章で、この反對の根本理由を説明する積りである。然し此處では是非とも、右の二學者を結びつける類似點に就いて及び人々が一般にこの類似點を見誤つてゐるこゝろに就いて注意を促したのである。此の兩者は、社會的なものゝ個人

的なものを如何にして區別すべきかに就いて問題を提出してゐる。タルドに従へば、社會的なものは模倣であり、個人的なものは發明である。デュルケムによれば、社會的なものは集團性によつて強制された行爲の規律であり、個人的なるものは各個人に任された様式である。この二學者にまつては、假令その標準が異つてゐるにしても、社會的要素としての人間行爲も個人的要素としての人間行爲もを區別し得る可能性があるのである。

余に於いては、兩者の理論の何れの上にも保留を有つてゐる。第一に、彼等相互の反對は、各々の説の不完全なるこゝろを證明してゐる。人間が同じ様に行爲するのは、或は自らが自發的に模倣するからでもあり、或は又社會組織が彼等に單一の途による様に強制するからでもある。第一の場合は、タルドの理由とするこゝろであり、第二の場合は、デュルケムの理由とするこゝろである。然しながら、兩者共にこの假説の全部について考へてはゐない。そして又人々は一方の理論の中に

も他方の理論の中にも互に取り入れることの出来ない何もものかあると信じてゐる。空間若しくは時間に於いて隔つた生物が類似した物理的若しくは有機的諸因子の勢力の下に於いて同じ様な方式で行爲する時は、模倣にもよらず、又社會的強制にもよらなくてよい場合があるのである。

他方に於いて又我々は、兩學者が個人的なるものと社會的なるものとの間に確立せんとした區別が、彼等の考へた程充分に根本的なものであるか否うか否いふとをも考へて見るべきが出来る。勿論研究上の必要からこの二つの部分を區別するのはよいことである。然しながら、實際上に於いては、この隔たりは全く些少なものである。社會的なるものは個人的諸要素から生ずるものであり、個人的なるものは社會的諸要素から滲透し來るものである。人間は、一方の無知覺的變遷によつて他方に進んで行くのである。調子の高い感情を有つてゐたガブリエル・タルドはそれに就いてよく氣付いてゐた。余は言ふ、總べての模倣の中には何等

か創意的なものがある。何となれば、變形することなくしては何人も原型を真似ることが出来ないからである。従つて、發明は斷えず模倣に混入して行くのである。同様にして、あらゆる發明は、既製の材料を利用し、先行者の探つた途に従ひ、かくて模倣の或る部分を包含して行くものである。若し此處で他の言表はし方を用ひ度いならば、諸多の社會的規準によつて強制された總べての行爲は、個人的方式及び時に屢々氣まぐれから來る様式に従つてでなければ行はれないのである。そして又個人的行爲は皆、少くとも限界として、一の社會的規準でもつて計量されねばならない。右の様な工合に、此の二要素の間には不斷の相互的滲透があるのである。個人的なるものを以て社會的なるものに反對のものであるとするところは不可能である。

だから、社會的なるものは如何に定義さるべきか否いふ問題は、殆んどその重要さを失ふ譯である。故に余は、社會的なるもの、爲に一の差別的の標準を探す必

要があることは考へない。余が寧ろ望んだことは、弱點によつて害はれない一の大きな定義を發見するところであつた。この故を以て、余は次の様な提言をしたのである。社會的なるものは、余の見るところによれば、多數個人の合致を豫想するものである。合致は單なる接觸ではない、一の共通なる活動、即ち一の協力を含んでゐるものである。二個の人間が、勿論當然三個以上の人間が考へ、話し合ひ、若しくは一しよに行爲するときに合致は存するのである。この會交が何等かの反對を生ずる時すらも、合致はあり得る。何となれば、この場合、其處にゐる人々に共通な意志を見出すところが出来らるからである。更に我々は、其處に一人しか居ない時でも、離れた所にゐる一人若しくは多數人の影響の下に明に行爲する場合には、合致を認めるところが出来らる。約言すれば、多くの生物の心の會交するところには、余の見るところによれば、そこに根元的なる社會事象は存するのである。余の用語は餘りに説明的でない、余は勿論それを認める。然しそれが目指すところは、其處に

あるのではないのである。それは單に確める丈けである。それは社會の範圍を毀損するものではない、従つて社會の範圍を變形するところもない。具象的科學の起首に於いては、全く有限的に決定する様な定義を用ひない方がよい。その全體を包含し、そしてそれにのみ適用するところが出来れば、論理上充分なのである。

## 第八章 社會の實體

タルドとデュルケムとの間に於いて約二十年餘も續き來つた問題の論争は、稀に見る廣汎なものであつた。この論争は、有識階級の人々に大なる興味を與へ、そして彼等を二派に分つた。その理由は疑ひもなく、彼等が此の二學者に固有なる定則の背後に於いて、永い間相反し來つた社會哲學の二種の一般原理を認め、又彼等が此れ等の原理を越えて、幾世紀も前から對立して來た社會の實際に關する二個の學説を見てゐたといふことに歸因する。タルドは徹頭徹尾個人主義者であつた、何となれば、彼の見た人間は主として同類者の發明を模倣する、若しくは更に稀には自己自ら發明する人間に過ぎなかつたからである。之に反してデュルケムは、個人の上にその壓制を及ぼすところの集團性を主として見た。若しその實際上の意義を固有なる科學の領域にまで誘導し得る様に「集團主義者」なる語を變

ずるところが出来れば、或る種の理由よりして、彼を社會生活の「集團主義者」と見ることが出来る。此れ等の二語——個人主義者及び集團主義者——を必要上使用するところは、正に、我々が取扱ふ科學上の問題と實際上の問題との關係を示してゐる。實際上の問題に於いては、個人主義者は個人行爲の範圍を擴大せんことを望み、集團主義者は社會集團を以てその部分より先んじなければならぬとする。前者は自由の原理を提けて立ち、後者は平等の原理を振り翳してゐるのである。科學上の問題と實際上の問題は、確に非常に異つてゐる。我々は、右の一方の問題に對して一個の意見を有ち得ながらも、他方の問題に關して何も有ち得ないこともある。又我々は、一方の問題に對して採る態度と反對な態度を他方の問題に關して採り得ることもすらもある。然しながら畢竟するに、一方に於いて採る解決が他方に關して許容する解決を支配し得る幾らかの可能性があるのである。論理から言へば、科學上の問題は實際上の問題を支配する。實際に於いては、事實上の偏見

が屢々科學上の疑問に對する解答を鼓舞する。そこで我々は如何に重大なる利害關係が此の論争の中に働いてゐるか、いふことを見ることが出来、又何故にこの論争が多數の人々を二派に分けたか、いふことを理解し得る。けれども多數の人々の間に幾分濫用されたこの論争の擴大に對しては、二人の首主唱者は責任を負ふ必要がないと言ひ得る。この二人は孰れも應用の問題を第一の企圖としなかつた。然かも、デュルケムの如きは常に細心の注意を拂つて此れ等應用の問題を取扱ふことを回避してゐたのである。然しながら、此れ等の事柄に於いては他の事柄に於いてと同じく、學派の首領は彼等がその先鞭をつけた運動を抑止する首長ではない。

偕て我々は此處に、社會に關する一切の研究を支配する大問題に逢着した。個人の觀念が主でなければならぬか、集團の觀念が主でなければならぬか、いふ問題がそれである。然しながら哲學者にまつては、右の大問題は既に一の先決

問題を明に決定してゐる様に考へられる。一體、集團は果して斯くの如く存在するものであるか、又その存在は如何なる種類のものであるのか。何故か、いふに縱し各個人間が觸知し得る且つ明白な一の實體を有してゐるにしても、此れ等の人間によつて構成されてゐる集團は此の點に於いて同一でないからである。故に、各個人のそれと比較し得る又實際對立させ得る價值を有する眞の統一として此れ等の集團を取扱ふだけの權利を果して我々が有つてゐるか、さうか、いふことを先づ探究しなければならぬ。

余の考では、此處に一の差別があると思ふ。社會的集團の實體は認められる。然しながら我々は、各個人から獨立せる一の實體をその集團中に認識することは出来ない。斯くて余はこれ等極端なる二個の提説の孰れにも與することが出来ない。純然たる個人主義者達に余は言ひたい、孤々の人間の存在以外の他の總べての存在を否定することは誤りである。次に又集團主義者達に言ひたい、都市

の中に於いて單なる人間の外に又人間に先在する一種の神性を認めることは少からざる誤りである。倍てこれから、これ等の二點に對する余の態度を簡単に辯明して見やう。

集團性を以て實在物であるといふからには、それが如何なる集團性として實在してゐるのであるかといふことを確にしなければならぬ。植物界及び動物界にあつては、我々は躊躇せず<sup>に</sup>生ける種の實體を認める。一見すれば、人間の種はこの點に關して他の動物の種と比較し得る様に思はれる。この考は、多くの大思想家達を誤らしめてゐる。既にバスケルは、人類を常に實在し又不斷に學ぶ一箇の人間であるを考へてゐた。オーギュスト・コントも又同じく、人類を偉大なる實在を考へ、それを各個人が地上に於ける彼等の保護者を見なければならぬものとした。この考は、今日普通一般に行はれてゐる様である。人間の統一はまだまだ實現されてゐない。此の統一は、人種的にも、經濟的にも、道德的にも、未だ存在し

ないのである。社會學者には、人類の種は、分解して全く別個の多くの斷片となり又屢々互に敵となることすらもある様に見えるのである。この分解は、生活の諸多の方面となり得る。右の諸方面に關しては後に余の説かんところであるが、その中で最も重要なものは、人種、言語、宗教、民族性等である。今最後の民族性のみ<sup>に</sup>就いて言はん<sup>に</sup>、諸民族は互に嫉視羨望して自己の獨立を要求する。社會學に於いて各個の民族が同程度の重要さを有つてゐることは、生物學に於いて生物の各個の種が有つてゐるよりも大であると言ひ得る。何となれば、諸民族の數は、動物の種の數よりも少いからである。一層精密な語で言ふならば、民族に關する社會的概念は、種に關する生物的概念に比較し得るものである。即ち諸物の現狀に於いては、人類の種を全く單一のもの<sup>と</sup>見る<sup>こと</sup>が出来ないのである。

けれども右の様な譯で、諸民族は著しくこの特性を有つてゐる様な傾向がある。我々が眞の統一及び實體を賦せん<sup>こと</sup>するのは、實に國家的集團へである。實際多



くの點より見るに各民族は各個人に似てゐる様に思はれる。諸民族は、一の名稱を有し、一の歴史を有し、多くの心的行爲及び特異の材料を有つてゐる。各民族は、一の國家を形成し、そして此の國家はその具象的代表者たる政府を有つてゐる。各民族は國際法に於いて、道徳的人格の諸多の屬性を有つてゐる。此の民族を構成してゐる各個人との諸多の關係の中で、二個の大なる事象が先づ目につく。一方より見れば民族は個人を作り、個人にその言語、多くの思想、及び多くの風俗を與へてゐる。民族は、各個人に分業上の役割によつてその地位を與へ、又かくして彼等の生存を確定してやり、それと同時に彼の行爲の限界を決定してやるのである。他方民族は、個人の消失した後にまでも残存する。即ち個人が死んでも、民族は生き残るのである。個人は百年も生きない、然し民族は千年もいや幾千年も生きて居ることが出来る。個人が古い細胞を除去し新らしい細胞を拵へることによつて若返る様に、民族は舊人の死去と新人の出現によつて若返つてゐる。又

著しい一の諸概念の種類に於いて、實際各個人が爲す様に、諸民族が相互に對して色々さ處理して行くのを、我々は見るべきが出来ないであらうか。怖ろしい憤怒の怒號の中に、戦争は諸民族を全く戰慄させ武装して蹶起させないであらうか。此の場合には、一民族の總べての成員は一人となつてゐるのである。總べての成員は、共通の敵に對して同一の熱情を以て立ち向ふのである。總べての成員は、一の憂慮によつて支配され、總べてが眞に唯一の心を有つに至るのである。かゝる悲壯なる又顯著なる場合に於いては、個人は赤誠を以て、自己の時間、自己の利益、自己の生命をば國家の爲に犠牲に供し、何等躊躇することなく、又何等保留することなく、國家の再興につくすのである。個人が戰ふのは、彼の財産、彼の家の愛する者の爲にはない。彼は實に祖國の爲に戰ふのである。然も彼はその祖國の中で別に抜んでゐるさいふ譯ではないのである。若し彼が國家の優秀なる實體を信じないならば、彼は果してよく國家の爲に自己を犠牲に供するであらうか。

右に述べたことは確に間違ひのないことであつて、その事實を誤認し若しくは遺忘するならば、それは不合理である。然しながら又茲に他の方面よりする問題がある。何となれば、人事は常に少くも異なる而して又通例相反する二面を有つてゐるからである。あらゆる織物が表と裏とを有つてゐる様に、又あらゆるメタルが表裏二面を有してゐる様に、その最も偉大なるものが社會を作り上げるまことのあらゆる人間の働きは、相反しながらも必然的に連結せる二面を有してゐる。此の二面は互に補償的のものであつて、一面のみでは何にもならないのである。ヘーゲルは二個の反對の同一性を許した。然しさうまでせずとも、余は又余の立場よりして少くも此れ等の反對の共在を繼起を許容する。余は今から、集團的生物の實體を擧示したいと思ふ。最初に一言附加して置きたいのは、此の實體は各個人から集團的生物を分かつものでもなく、又各個人から集合的生物を獨立にするものでもないといふことである。獨逸の難解な一派の學者達が望

んだ様に、國家は決して自己自身で存在し又人民の一致を要しない一個の特有なる生存 (selbststanding) を賦與された神秘的實體ではない。右の如き神秘的概念は、佛蘭西思想の赫々たる光の下にあつては速に消失し去るまところのものである。それにも拘らずこの概念に對して警戒しなければならぬといふ譯は、デュルケムの論議に於ける或る種の言明が、佛蘭西に於いてすらもこの用語が一部に採用されてゐる様に考へさせてゐるからである。言ふ迄もなく、社會は決して各個人から離れた一の實體ではない。我々が社會體と言ふまき、それによつて明に理解するまところのものは人民の全體である。そして又我々が集團的精神といふまきは、各個人の共通心底に於いて又彼等を連結する諸觀念及び諸感情の中に於いて考へられたる個人的精神に就いて考へるのである。集團は、その諸成員によつてのみ又その諸成員の中に於いてのみ生存するのである。——人民は國家の爲にのみ生存してゐるま我々が言ふまきには、二個の意義があり得る。如何にも我々は、

同類者の全體の爲に働かなければならないといふこと、又その事が確に優越なる道徳上の則であるといふこと、然しながら又それは少しく異つた方法によつて作り上げられたものであるといふことを知つてゐる。言ふ迄もなく我々は、政府の爲に働かねばならぬといふことを會得してゐる。然しながらこの考は、主權者が祖國を具象してゐる君主國にあつては許されるかも知れないが、共和國に於いては最早不可能である。共和國に於いては右に反對に、我々は、政府は人民の爲に働かねばならぬ、政府は人民の必要によつてその存在の理由を獲てゐる、政府の齎らす利益は、その主義及び限界を同一人民の集合の利益の中に有つてゐる、と言はなければならぬのである。斯くて、各個人の有する諸多の權利は、國家の有する諸多の權利及び國家の代表者達の有する諸多の權利と相並んで出現するのである。斯くの如く右二種の權利は、互に相關的のものとして、相互に對部 *contre-partie* 及び對重 *contre-poids* をなすものとして、更に正確に言ふならば、各々其の起源を同一の

資源から引出したものと、又兩者共に同一權利の二面に過ぎないものとして現はれ來るのである。

此處に於いて、權利が直接に事實より發出したものであることが分かる。若し相反せる然かも相分つべからざる二個が相對立して存するならば、それは同一の態度の中に二個の相關的實體、即ち個人及び集團が存するからである。余が既に述べた通り、後者は純然たる抽象物に過ぎない。こは言へ、それは前者の爲にのみ存在するものである。この二個の命題は同時に眞である。如何にして然るか。それを知るには只一の手段がある。それは、集團が各個人の一の組織によつて構成せられ、そしてその組織が集團に一の材料を與へ各個人に一の形成を與へる、といふことである。右の概念は、本性上反對なる提説を恐らくよく和解させるものであらう。然しながら人々は、余に右の概念を完全に説明せんことを要求し得る。即ち余が次に試みんとするのはその説明の完成である。

## 第九章 社會契約即社會有機體

集團が各個人の一の組織であるといふのは、如何なる意味に於いてあるか。此の實問に對しては、既に多くの解答がなされてゐる。それ等の解答の中、今日最も認められてゐるものは、契約説及び有機體説といふ幾分粗雑な名稱の下に、最初互に對峙してゐた二個の體系の何れかに屬してゐる。余は自己の立場よりしてこれ等を調和させることが出来るを信じてゐる。

契約説は、その發現の際、それに先存する諸多の説よりも争ふべからざる進歩をなしてゐた。以前の諸説は、社會の連結を權威といふ唯一の原理の上に置いてゐた。勿論、これ等の説が權威を、物理力、遺傳、若しくは超感的意志の發現に歸してゐたことは、言ふまでもない。然るに社會契約説は、右の連結の中に、諸成員の意志の發現を認めた。契約説は、社會生活を以て多くの利害關係の自由なる又自發的な

る一致から生じたものであるを考へてゐる。故に社會生活は人間自治制の一部であり、そして又集團の生存は社會生活を確認し、且つ鞏固にする目的を以て此の自治制を有してゐるのである。此の説は最初、スピノザによつて草案された。次いでジャン・ジャツクルソーは、雄辯を以て此の説を叙べてゐる。カントに於いても又、これを見出すことが出来る。此の説こそ、人間及び人民の權利を宣言したところのものである。佛蘭西共和國の憲法、及び意識せるを否かを問はず現代の自由主義を未だに支配してゐるもの、又此の社會契約説である。

此の説は、行爲の原則としては、明に最も満足を與へ得るものである。然し歴史の説明としては、さまで役に立つものは考へられない。此の説が唱へ出された時には、右の點に關して餘り要求されてゐなかつた。既にルソーにして、これを言ふのに假定的の文句を以てしてゐたに過ぎない。彼の社會契約の初めの諸章に於いて彼は考へてゐる、人類の厥初には人間が孤立的生活をなしてゐた自然の狀

態があり得た。然し彼は、かゝる状態の存在を確言することに回避してゐる。今日では、右の様な説は一の支持し得られない命題を考へられてゐる。人間が初め孤立的生活をしてゐたといふことは、最早何人も信じてゐない(尤も以前には誰か信じたであらうが)。社會は我々には、原本的事象として發現したのであつて、孤生的事象として發現したものではないのである。

これが有機體説といふ名稱の下に知られてゐる學説の基礎をなす原理である。事實この説は、非常に古くからある。古代及び中世では、少くもしかく觀察してゐた(註一)。けれども十九世紀に至つて、この説は非常に科學的な外貌を示す様になつた。オーギュスト・コントは「社會有機體」に就いて述べたが、この言ひ表はし方に關して多くの遠慮をしてゐた(註二)。ハーバート・スペンサーは、此の説を採用して多くの著述をなした。彼の社會學原理の第二卷は、此の説の價值を確説したものである。これと同一の考は、他の國々の多數の學者によつて同じ様に採用せら

れた。特に著しいのは、露國の社會學者ジャツク・ノビコフ(註三)、及びパウ・ルド・リリエンフェルド(註四)である。然しながら、獨逸著名の學者アルバート・シエツフレは、これ等の通説に反對し、「多くの修正を加へて」——若しかく言ひ得るならば——始めてこの説を採つてゐる。何となれば、彼の主著(註五)の劈頭よりして、「社會は一の組織であつて、有機體ではない」といふことを明に書いてゐるからである。佛蘭西に於いては、有機體説は主として連帶説と混じり、今日では——恐らく何等充分なる論理上の理由無しではあるが——それと分かつべからざるものとなつた様である(註六)。

註一、 Ludwig Stein, Les conceptions Mécaniques et organiques de l'État. Revue internationale de sociologie. 1911.

註二、 Systeme de politique positive, tome II, Chapitre V.

註三、 Conscience et volenté sociales.

註四、 Pensées sur la science sociale de l'avenir. (露文及び獨文にて發表)

La pathologie sociale.

註五、 Bau und Leben des Sozialen Koerpers.

註六、 主として Léon Bourgeois, Solidarité. を見よ。

此の説の支持者にまつては、人類は一時社會形式を考へなかつたのである。けれども事實人間は常に社會形成を認めてゐた。アリストートルの有名な言に従へば、人間は本性上社會的動物である。社會は人間の自然環境であり、而して又實際會つてさうであつたのである。人間は單に、社會有機體の細胞に過ぎない。これ等の細胞は社會有機體の中に於いて、個々の有機體の中で生きた細胞が有つてゐるのと同じく、多くの關係を有つてゐる。これ等の細胞は生きた細胞と同じく、諸組織の中に又諸系統の中に、諸器官の中に又諸機關の中に、配置されてゐる。

個々の有機體と同じく社會有機體は、營養上の生活、生殖上の生活、交際上の生活をしてゐる。これ等社會有機體は個々の有機體と同じく、應化、遺傳、淘汰等の生物學上の大原理に従つてゐる。社會有機體は個々の有機體と同じく、多くの病氣及び多くの危険によつて制御され、そして出生、生長、成熟、老衰、及び死の繼起的諸程を同じ様に經てゐる。右の如くにして、二種の集合の構成要素の間に於いては、此れ等の集合それ自身の間に於いて、同じく對比が續けられて行く。

右の様な對比は如何に考ふべきであらうか。余は信ずる、我々は、諸多の大系列に於いてこの對比は或る種の正確なる連鎖を表はしてゐる、といふことを認めなければならぬ。例へば、分業は生存體の諸多の部分に於いて、同じく、確に社會の諸多の部分間にも存在してゐる。この分業の結果、結合してゐる諸成素間に、役務の交換が生ずるのである。此の交換は、此れ等の諸部分間に一種の義務的連帶を作る。而してこの連帶は後に至つて、社會内部に於いて反映する様になり、又

望まるゝ様になり、かくして道德の多くの基礎の一を形成するここが出来るのである。右の如き一般的對比を試みた後、更に進んではそれ等の特殊的對比がなされる。社會生活に行はれてゐる事象の中、或ものは、有機體の生活に於ける諸々の現象の充分顯著な様式を偲ばせる。即ち、富の流通は血液の循環と類似してゐる。スペンサーは、電線と神経網とを比べて、その間に不思議な平行のあることを素描した。けれども斯かる對照が如何程暗示を與へるものであるにせよ、右の最後の例でも知れる通り、我々は適當な時機に於いてその途中で立止り、我々が一の科學上の對照を一の純粹なそして單純な比喩に變じやうと望んでゐないか、どうかを注意しなければならぬ。

此の點に關するここを概括して、次の如く言ふここが出来る。即ち、諸多の社會過程の基礎及びその遙遠且つ不完全なる雛型は既に諸多の有機體の過程に存する。諸多の社會は諸多の有機體と同じく、生ける自然の一部分を形成してゐるものである。故に、此れ等の二者は共に、同一なる一般理法の下に支配されてゐる。従つて生物學が研究する整頓の様式及び行爲の様式は、社會學が探究する諸多の對象物の中に見出される。然しそれは、非常に廣大なものであり、且又複雑なものである。人間の觀念及び意志の働きの下に、新たに無數の要素が導き入れられる。誰もよく知つてゐる通り、人間のこれ等の觀念及び意志は、最も複雑なる空間中に於いて最も多種なる、又時間中に於いて最も變化的なる、一切の宇宙活力によつて出来てゐるものである。斯かる理由によつて、例へば、人體中の血液の循環が簡單且つ一定の圖解を以て示されるに拘らず、人間社會に於ける富の流通は右の如き圖形では表はすことが出来ない。我々が富の流通を示す爲に作製する圖表は、多くの交叉した線によつて出来てゐる。此れ等各個の圖表は、高々一民族にまつてしか價值ないものであり、其上少くとも十年目十年目には修正しなければならぬ。斯くの如く困難であるが故に、人々は屢々此の種の仕事を拋棄するの

である。それから又右の事實によつて、經濟學が動物生理學よりも、より不精密であり、より可能性の少ない達成しか爲し得ぬ科學であるといふことが明になつて来る。

人間の創造は自然の鼓舞によるのであるけれども、人間は自然を凌駕するこゝが出来来る。人間の有する器具機械が、彼の環境中に發見された或る種の形態を模造したものであるといふこゝは疑ふべくもない。然しながらその一部分は確に人間自身の發明の所産である、即ち肉又は手を模倣したものであり、飛行機の翼は鳥の翅を模したものである。然しながら、人間は更にそれ等に改良を加へてゐる。右二種の發明に要した工夫と技倆に就いては、其の程度の差は非常に大ではあるが、又それを完成するに要した努力の差も幾世紀の隔たりを有つてゐる。右の様な特殊な多くの作業について言ひ得るこゝは、最も一般的なる人間の作業即ち集團生活の組織についても同様に言ひ得る。この組織は、自然が供給する一の狭

い又簡単な基礎の一部分である。これは驚くべき高さこ大いさの上部構造を形成する爲に、永い年月の間不斷の努力と發見物の蒐集によつて出来上つたものである。然しながら右の高大が却つて弱點となつた。

概言すれば、この建築の中に有機的なる或る物を残したのである。けれども、この有機的なる要素は、回復されるこ同時に利用され又發達させられた。これをなしたものは、繼續的なる而して又無數なる諸多の心的關係である。エスピナスの巧妙なる言辭を籍りて言へば、社會は言はゞ「諸觀念の一の有機體」なのである。

右の如き譯であるから、本章の初めに豫め叙べて置いた通り、有機體説と社會契約説との間に和解が出来ると認めるのである。右の兩説は共に確實な一の要素を有つてゐる。兩説共に實體の一面を表明してゐる。此れ等の二面は單に並存しやうこ否や寧ろ重なり合はふこする要求を有つてゐる。有機體説は、諸多社會の發足點を了知せしめる。契約説は社會の歸着點を會得せしめる。諸多の社會は



有機體として發生し、そして最初有機體に於ける同一理法に従つて組み立てられる。次に社會は、特に一層人間的なる一の様式によつて進歩し、そして精神によつて知らるゝ一の理想即ち正義、平和、自由、光明等の理想に向つて進んで行く。社會は其處でその諸成員の間に、契約的なる一の平等、一の連帶を實現しやうとする。斯くて我々は、有機的世界から、心的世界を介在させることによつて、何等の動搖、何等の中断なしに社會界へこ入つて行くのである。社會、少くとも我々が今日斯くの如きものであることを考へ、又斯くの如くあれかしと望むところの社會は、アルフレッド・フイエが最も巧妙に言つてゐる通り(註一)、眞に一の「契約有機體」であると思ふ。進化の觀念は、定式の二極點を接近させ、そしてその合一してゐることを了知させる(註二)。

註一、 *La science sociale contemporaine.*

註二、余は既に有機體説の諸原理を採用し、一八九六年に公刊した *Organisme et société.* なる一書の中でそれ等の原理を發展させて置いた。

## 第十章 社會學の區分

若し社會が、或る程度に於いて有機體と比較し得べき實體を有してゐるものであるならば、その研究は或る點に關しては、自然の諸科學と接近してゐなければならぬ。自然に關する諸科學は實際非常に進んでゐる。だから我々は、社會研究の前途を照すべき若干の光明を、自然研究から借りて來なければならぬ。實際の現状は右の如きである。余は信じてゐる。そして又余の考ふるところによれば、斯く利用することは二個の方法でなし得る。一方には、此の種の考察は、社會學の區分を精密ならしめる爲に役立つ。他方には、此の種の見解は、社會學の方法を精密ならしめる爲に役立つ。然し本章では、右の二問題の第一の方のみに制限したいと思ふ。

社會學の區分に關する問題は、この科學の創始者たるオーギュスト・コントによ

つて既に假定された。此の問題を解決する爲に、彼は社會學と力學との比較によつて啓示を亨けてゐる。これは全く順當なことである、こいふ譯は彼にまつてはこの新科學は社會物理學であつたからである。故に彼は、斯の科學を二部に分つこころを提説した。社會靜學及び社會動學即ちこれである。彼の實理哲學講義は六卷の中その三卷を以て社會學にあてられてゐる。この中彼は、第四卷をば靜學に充て、第五卷及び第六卷をば動學に充てゝゐる。又四卷より成る彼の實理政策體系に於いては、靜學が第二卷を占め、動學が第三卷を占めてゐる。彼に従へば、靜學は人類秩序の理論であり、動學は人類進化の理論である。前者は社會の不動的諸要素を研究し、後者は變化的諸要素を考察するものである。彼は非常に正當に考へた、此の區分は力學の區分、又生物學の區分に對比するものである。其理由として、靜學は解剖學に匹敵し、又動學は生理學に匹敵する、こ彼は言つてゐる。然しこの最後の觀點に關しては、其の誤謬は明白である。これに就いては後程述べ

る積りである。先づ最初に示して置かなければならないのは、彼の見解中に於ける正確な點及び暗示に富める點である。

組織の面白い觀念であり、又今日尙ほ保有されなければならぬこころのこころは、社會がその靜止に於いても、換言すれば一の與へられたる時間の方面からも、又その運動に於いても、換言すれば繼起的時機に表はす諸形式の系列に於いても、研究され得るこいふことである。然らば、我々は、佛蘭西の社會について叙述するこころが出来るであらうか、若しくは更に制限され更に識別し得る對象として、右の地方的諸要素、例へばノルマンディー又はガスコニュに就いて叙述するこころが出来るであらうか、若しくは又右の機能的諸要素、例へば司法官又は教育係について叙述するこころが出来るであらうか。我々は、範圍の廣狹に拘らず、その現狀中に右の對象を探り、そしてその總べての詳細を知ることが出来る。然るこころは社會靜學が成立する。我々は又之を反對に、諸物の現狀に達する爲に、先づその起源より始ま

り時の歷程を以て續く歴史生成の中にも、同一の對象を考察するこゝが出来ぬ。此の場合には、社會動學が成立する。右の二個の作用方法は共に正しい。右の二者は夫れ々々便利ではあるが、當然又不便なこゝもある。何となれば、此の二者は何れも全體の眞理を把持してゐないからである。こゝはいへ、彼れ等の二者を合すれば全く完全なものとなる。故に此の二者は、協働しなければならぬ、いや寧ろ相互に使役されなければならぬ。オーギュスト・コントは此の點をよく見てゐた。これを明白にしたこゝは實に彼の名譽であるこゝはなければならぬ。

然しながら不幸にして、他の總べての殘餘の點に關しては、我々は保留を表明しなければならぬ。先づ第一に、オーギュスト・コントは、動學に比べて靜學を非常に重要視した様である。彼は、諸多社會には恆久不變の秩序があり、その秩序はそれ等社會の不斷の運動の中に確實に固着してゐる基礎となつてゐるかの如く述べてゐる。けれどもこれは非常に疑はしい。現代多くの社會學者から見れば、進化

は主要な事象であり、あらゆる社會生活は毎に變化し、而して停滯するこゝいふこゝは社會生活では一の例外の事象である。いや寧ろ更に正しく言ふならば、停滯は單なる外見に過ぎない。余は言ひたい、停滯の如く見えるのは、運動が我々の感官に觸れない若しくは我々の精神に感じられない場合である。然しながら其處に存するものは主觀的印象に過ぎない、この印象は實體に一致しないものである。何故かといふに實體に於ける運動は停滯するこゝがないから。——若しこの見解が確なものであるなら、動學のみが諸物の實質にまで達し得るものである。靜學は精神の單なる便宜的方法に過ぎない。人々は、靜學によつて、一寸前には異つたものであつた又すぐ後には全く新らしいものとなる一の社會狀態の形象を確定するこゝは出来る。然しながら斯かる形象は、早取寫眞の價値しか有しないであらう。勿論これは確實なものであり得るし、又かゝる權限に於いては有益でもあり得る。けれどもそれがなす説明は、非常に限られた一の範圍を有つてゐるに

過ぎない。實に純然たる一時的のものである。科學は決してこれで満足してはならない。

そればかりではない。我々は、コントの區分について、他の多くの誤謬を非難するここが出来る。第一は、不確實な概念から出て來た不完全な用語である。コントは、社會學を力學に比較しやうとした。彼が靜學と動學とを區別したのは、其の爲である。然しながら、力學は元來三個の部門に分れてゐる。靜學、動學、運動學、即ちそれである。右の中、運動を研究するものは運動學であつて、動學ではない。コントは明かに此の基本的觀念を知つてゐた、といふのは彼は理工科學校に於いて解析ミ力學との復習教師をしてゐたからである。故に人々は、彼が社會の諸運動の研究を以て社會運動學と呼ぶべきものであると信じなかつたこと、又此の研究に社會動學の名を付し慣用語を右の如く否認したことについて何等説明しなかつたのを不思議に思つてゐる。其の結果彼は、社會力學の三成分の二を再生さ

せ、最も複雑なる此の科學に於いて物理力學といふ一層單純なる科學すらも拒否する專斷の演繹を用ひた。然しながら、彼が右の如くなしたとしても、その動機は彼のなした他の誤解から來てゐるのである。余は次にその誤解について説明をしておかなければならない。

此の第二の誤謬は、力學の一般的區分と生物學の一般的區分とを間違つて同一視したここに起因してゐる。生物學は元來解剖學と生理學とに區分される。然るにコントは、解剖學を靜學に、生理學を動學に對應するものであると見た。けれども、斯くの如き動學の概念は不確實なものである。解剖學は諸器官の研究であり、生理學は諸機能の研究である。コントによれば、靜學は靜止の研究であり、動學は運動の研究である。彼の言ふところによれば、解剖學は靜止してゐる諸器官を研究し、生理學は運動しつゝある、即ち作用しつゝある諸器官を考察するのである。然しながら、問題の最も主要なる點は疑ひもなく此處に存してゐるのである。其

の語の最も深い意義に於いては、諸器官の運動は、それ等の諸器官の機能の單なる平常的作用ではなくて、作用それ自身の効果による諸器官の變遷、即ち一言にして言へば諸器官の進化である。この進化の研究こそ諸生體の眞の動學を構成してゐるものであつて、コントが動學なる用語を採用したのは此の意味、即ち運動學の意味に於いてある。生理學は、或る意味に於いては、解剖學よりも靜學的であることは言はれない。何となれば、生理學は一の與へられたる時間に於ける諸機能を研究するが、同様に解剖學は一の確定せる時間に於ける諸器官を研究するからである(註一)。

註一、余は之に關する總べての問題を努めて余の著 *Objet des sciences sociales*, chapitre X. に釋明して置いた。

生物學に深く通曉してゐたコントが何故に、非常に簡單になし得る此の分析をしなかつたのであるか。彼は、何故に、作用即ち靜學的事象を、變遷即ち彼の用語に

於ける動學的事象を混同したのであるか。その理由の第一は、此れ等の二現象が本質に於いて連結してゐるこいふことである。諸生物の變遷は、それ等生物の作用から生ずる。諸生物の器官の働きは、諸生物の生長と衰退とを説明してゐる。然しながら茲に警戒を要することは、結果を原因の中に入れてはならないことである。若しコントが然したならば、それは第二に、我々が今日有つてゐる様な有機的進化の觀念を有つてゐなかつたことに歸因する。勿論、彼はラマルクを知つてゐたのみならずラマルクを非常に賞揚してゐた。其の證據に、彼はラマルクを呼ぶのに常に「非凡なるラマルク」を言つてゐた。けれども彼は、ラマルクの學說には左擔しなかつた、こいふ譯はこの説が當時のあらゆる科學から批難されてゐたからである。彼がダーウキンを知らなかつたこいふことは言ふ必要もない程である。何故かこいふに、種の起源の出版より二年前に彼は死んだからである。故に彼は進化論者ではなかつた、従つて變遷の諸現象に彼の注意は向けられてなかつた。實を言へ

ば、彼が有機的動學を呼んだもの、眞の材料を、彼はこの變遷の諸現象の中に見なければならなかつたのである。

然しながら、假令彼が種の進化を認めなかつたことは、明に個體の進化を認めてゐた。他の人々と同じ様に、彼は、有機體が出生・青年・成熟・老衰・死滅等の繼起的諸程を経過するといふことを知つてゐた。或る時には、諸多の有機的變遷が諸器官の單なる作用と同一のものでない、と彼は考へてゐた。斯くの如き次第であつたから、彼は右を説明する爲に、可成り後に至つて、生存と生命との間の相違を示さうと試みた(註二)。更に後に至つて、彼の第一の學徒たるリットレは、保存の生理學と生長の生理學とを再び區別した。然しながら、其處に無理な讓歩が澤山ある、まだまだ一層突込まなければならぬ。

註一、 *Système de politique positive, tome II, chapitre VI.* に於いて、コントは次の如く書いてゐる。「各個生物の生命は、その生物が生存中に遭遇する多くの

變形によつて構成されてゐる。」

余の必要を考へることは、一層複雑な科學たる生物學及び社會學が、力學の三區分に從ふことである。生物學に於いて若し解剖學が靜學に對應するものであるならば、生理學は動學に對應し、又進化の研究は運動學に對應する。余は必ずしも絶對的の態度で右の對應を主張するものではない、けれども、少くも右の對應はコントの創めたそれよりも餘程正確である様に思はれる。社會學に於いても、生物學に於いてと同じ様にすることが出来る。有機體と社會との間の接近の度合に迷はされることなしに、前者に於いてと同じく後者に於いても、我々は研究するここが出来らう。即ち第一にその諸多の構成要素及びそれ等の要素の組成、即ち社會の諸構成及び社會の諸器官、第二に此れ等の要素及び器官の作用、第三にそれ等の進化、即ち諸構成の變遷及びそれに隨伴せる機能の働きを研究することが出来るのである。故に我々は、社會學に於いて三部門を區別することが出来る。

る。生物學に於いて使はれてゐる用語を再び借り來つて、我々はそれ等を社會解剖學、社會生理學、社會個體發成學と呼ぶ(註一)。若し又力學に使はれてゐる語法を撰みたいならば、我々はそれ等を社會靜學、社會動學、社會運動學と呼ぶことが出来る。然しながら此れ等の用語は孰れも不便であると思ふ、何となれば、それ等は孰れも社會學を一層單純な科學として仕舞ひ、そして各々がそれに殆んど吸収されるかの如く信じさせる傾があるからである。故に余は、恐らく右のよりは専門的ではないだらうが、然しそれ等より一層根據の深い術語を用ひて、社會學は三個の研究對象即ち社會の諸構成、社會の諸機能、及び社會の進化を有つてゐると言ひたいのである。

註一、エルネスト・ヘツケルが、個體發成といふ名稱の下に、總べて有機體の發達に隨伴するところのものを指示せんとしたことは、何人も知つてゐる筈である。

## 第十一章 社會の成素

社會學者が、その研究せんとする特定の社會集團に對して第一に課せられてゐる仕事は、何が此の集團の成素であるか、又如何にして此れ等の成素が組成してゐるのであるか、といふことを知るこゝである。

此れ等の成素の中で、先づ二個の大なる範疇を區別しなければならぬ。我々が最初に考へるものは、考察される集團の中に包含されてゐる人間といふ生物である。然しながら人間の外に、多くの事物があつて人間の行爲の影響を蒙つてゐる。此れ等の事物も亦、人間と同じ様に矢張り社會に屬してゐる。此れ等の事物の職分は同一類のものではないけれども、又それは通常所働的(必ずしも常にさうであるとは言へぬけれども)ではあるけれども、此れ等は集團生活から不可分のものである。人類は、若しこれが無いならば、存続するこゝが出来ない。故に此れ等

の事物は、社會學者の仕事の中に、顯著な地位を占めてゐるのである。だから余は、先づ右の事物に就いて述べ、然る後人間自身に關して一層長い叙述をすることに、正當であると思ふ。

(一)——社會の非人的諸成素即ち諸事物は、社會學に於いては、二類に區分される。一は自然の產出物である。他は人爲の產出物である。

先づ、自然の單なる產出物を簡單に列擧して見やう。第一に地表である。地表は、一切の人間活動に缺くべからざる場所である。地形の如きは、特に山學的及び水路學の見地よりすれば、人間活動の上に決定的な影響を及ぼし得るものである。——第二に地下である。地下は、その豊富なる礦物とその植物に供給する營養分によつて、工業と農業とを支配してゐる。——第三は、右に對應いや寧ろ對稱せしむるならば、我々が「地上」と呼ぶことの出来るものである。余が之によつて指示せ

んと欲するものは、大氣(氣候、氣象、諸多の物理力を含む)である。余は更に、地表が產出する諸多の植物の種及び動物の種をも、右の中に包含させたい。右に述べた總べての成素は、人間に大なる影響を與へるものである。然しながら、人間は又、それ等の成素を自己の企圖に利用し得ることを知つて居り、又それ等を自己の作業の構成成分として役立たせてゐる。

偕て其處から、余が技術の所産を呼ばんとする第二類の事物が正に生ずるのである。余が此處で用ふる意味の技術は、「自然に添加されたる人間なるベークンの語に従ふものである。故に、若し自然を以て技術の所産の材料を供給するものであるとするならば、その所産の形式を提供するものは人間であると言へる。此れ等の所産は、我々の主要なる欲求を満足させる對象物即ち食料、衣服、家屋及び家具である。諸多の裝飾たる贅澤品も亦右に屬する。これは過剰品には相違ないが、大多數の人類にまつては必要となつてゐる。武器も亦然りである。最後に又前



述の總べての對象物の製造に要する諸多の器具類も、人爲的所産の中に入れることが出来る。

我々は、知らず識らず多くの變動を経て、右の二類の一つから他の一つへ移つる。斯くて、一個の果實が、それを生じた木に附着してゐるときは、第一類に屬する。然しそれが摘み採られた時、殊に直ちに食料となるときは、第二類の要素の中に入る。故に茲に警戒を要するところは、此の分類の價值、就中その嚴密さを誇張せざるべきである。此處に、大抵の場合に於けると同じく、その内容中に何等かの秩序を置かんが爲め、諸多事物の間若しくは特に精神が諸多事物についてなす諸觀念の間に、實體が少しも知らない多くの區別を作る様に精神が強ひられるのである。

人々は、社會學に於いて、社會の非人的諸成素の占むる地位を作つてやることを忘れてはならない。然るに人々は折々之に反して、之等の諸成素を幾らか重要視し過ぎる傾がある。或る派の體系では、確に此の種の成素を誇大視してゐる。エ

ドモンド・ドモランの建てた體系はそれである。この體系の教ふる所に従へば、人間の特性はその採る營養から來るものであり、又各個種族の特質は、それが古代に移住した際採つた進路によるものである(註一)。非人的成素を誇大視するところは右の學派に非常に異つた思想方面に於いても行はれてゐる。カール・マルクスの學派がそれである。此の派に従へば、經濟的生産の要具は、あらゆる社會的因子の中で最も重要なものである。何となれば、物質的生産の生産様式は、一般に、總べての政治的・知的及び社會的生活を支配するからである(註二)。右等の如き斷定は極端に過ぎるものであつて、かゝる奇抜なる思想は通常實際に警戒を要するものである(註三)。然しながら此れ等の斷定は確に、それ自身丈では精確な觀念、即ち人々には諸多の事物が必要であるといふ觀念から出て來てゐるのである。

註一、次の諸書を見よ。

Les Français d'aujourd'hui. Les grandes routes des peuples.

註二、 Le capital.

註三、 特に次の書を見よ。

Jean Brunhes, La géographie humaine.

(二)——非人的諸成素が如何に重要なものであるかは言へ、社會構成の中では、人的諸成素が更に々々重要なものである様に思はれる。人的諸成素の叙述は、同時に、自然諸科學と正しい意味でいふ社會諸科學との兩者に屬してゐる。自然諸科學は、總べての種に共通なる諸多の特質に於いて、人間を考察する。社會諸科學は、諸種の部分に特有なる諸多の特質に於いて、人間を考察する。斯くて、解剖學は人間體の一般的構造を叙述し、民勢學及び土俗學は各個の人民及び各個の種族の特殊の構造に就いて叙述するのである。人的諸成素が如何に働くか、又社會學がそれ等の事實を如何に利用するか、といふことを理解する爲には、人間が結合する様

式に注目しなければならぬ。故に、余が尋究せんことを欲するところは、如何にして社會的構成が社會の人的諸成素の組成から生ずるかといふことにある。

觀察の示すところによれば、此れ等の諸成素中に、集團の様式を少くとも五個擧げるこゝが出来ぬ。諸多の原始社會の基礎を成すもので最も古くから認められてゐたものは、血縁による集團である。血縁が結び付ける人々は、相互に粘着する第一のものである。のみならず又、この血縁は非常に多くの様式に包含され得る。すつと以前に人々は信じてゐた、男系血縁に基礎を置く家族、即ち父權的家族がある。此の家族中一番古いものである。羅馬・希臘・印度・猶太等に於ける例が、此の說の根據をなしてゐたのである。然しながら、半世紀前頃から考へ方が變つた。バコフ・エン、マック・レナン、リウス・モルガン、及び右說の多數の反對者達は、母を中心とする母權的家族の存在を又それが最も古いといふことを明にした。原始社會に於いては、いや少くともその大多數に於いては、今日我々には非常に「自然

的であると思はれる原則に、極端に反対な多くの原則が行はれてゐた様である。強制的な異族婚階級による婚姻關係(普通の一夫多妻及び一妻多夫の兩者を含む)父子關係の不知、個人的家屋の缺如等即ちこれである(註一)。然し此處では、時と場所とに於ける右の諸原則の地位を論議したいと思はぬ。——此の地位は、人々が屢々考へてゐるよりも一層制限することは出来るが。——只余は、家族の原始的原則を検證するだけに止めたい。但し、余が先程確めて置いた檢證、即ち最初の人間集團が家族であつたかといふことを決して變更するものではない、只最初の集團の組成様式が父權的家族であつたか、又は母權的家族であつたかといふことを問はない迄である。

註一、 Giraud-Teulon, *Les origines du Mariage et de la famille*, を見よ。

此の書の刊行以後、多くの面白い研究がなされ、そして發表された。

此れ等の研究、就中 *L'Année sociologique* の各巻で繼續的に、發表された研

究は、斷片的のものである。だから引用するに適當な綜括が未だなされてゐない、その理由は右の諸研究の範圍が非常に制限されてゐた故であると思はれる。

此の第一の社會類型に次いで構成された第二のものは、血縁者のみならず近隣者を以て造られた。諸種の家族は、相互に接觸する様になり、幾らかづ、併合された。斯くて、非常に大きな部落が建設されたのである。部落では、人々は統一されてゐるこいふことを感じた。その理由は、彼等の種が互に接近してゐるこいふ單なる事實によつてである。家族の段階に續くものは、部族の段階である。——勿論余は此處で、人類の歴史の梗概すらも叙べやうと欲するものでなく、又此れ等の名稱を中心として續けられてゐる論争に加はりたくもない。就中、此れ等の原初の集團に、ルトゥルノーが提供した氏族なる名稱が妥當であるか、又デュルクムが主

張した群なる名稱が適當であるか、さういふことに關して尋究しない積りである。

——余が單に言ひたいのは、部族が土地に固定し、そして或は平穩に、或は又屢々戰爭によつて他の部族と結合した時、多數の社會類型が、部族から別れ生じたさういふことである。斯くして、多くの希臘の都市、多くの亞細亞の王國、羅馬帝國、又終には近代の諸民族が發現したのである。——然かのみならず我々は、近代の諸民族の間に原始的聚合の諸多の様式を見出すことが出来る。一方には、家族が存在してゐる。そして血縁關係の原則すらも擴大されてゐる。何故かさういふに、種族は現今、血縁關係の上に成立してゐるからである。此の種族は、擴大された家族の如きものである。種族の成員は必ずしも總べて血縁者ではない、然し、血縁者たることは出来る。何さなれば、彼等成員は自分等の起源が同一であることを隠けながら認め、そして互に結合し得るものと信じてゐるからである。即ちこの集團の中には、所謂「血液の自由なる循環」が存在するのである。同一の種族が擴大して種々の

民族とも成り得るし、又同一の民族が種々の種族をも包含する。他方に於いては、近隣者が一民族の諸成員の日常關係を支配してゐる。佛蘭西では、諸成員は、市町村、郡、區、縣、及び地方、州等に集められてゐる。此の集團が生成する方式は、民勢學者達によつて注意深く觀察されてゐる。彼等の教ふるところによれば、一國の人口の總數のみならず、又都鄙の多くの中心地に於ける人口の分布、人口の密度、及び所謂人口の「道德的密度」即ち諸成員間に於ける連絡の便宜及び迅速すらも、重要なものである。故に畢竟、原始的接近の二要素、即ち血縁者及び近隣者は、幾世紀を経て今に存続してゐるのである。

然しながら、此れ等の外に尙ほ、他のものがある。先づその一要素は、職業である。少し擴大された社會では、何處でも、分業が行はれる。或る種の人々は、一の特殊な仕事に従事する。斯くて彼等の間に、協力關係が生じ、次に友誼關係が生ずる。彼等の偏好の類似は、彼等を結びつける様になる。中世紀に於いて同業組合、現今に

於いて企業組合が成立したのは、右の如き理由によるのである。集團の此の方式の重大であることを見るには、右二結合の名を挙げれば充分である。我々は此の方式が近代社會生活の諸機關を作り上げた、と言ふことが出来る。

職業と階級とを混同してはいけない。職業は、特定の結果を生ずる爲に働く總べての人間を包含するものであつて、此れ等の人間の社會に於ける地位を問ふものではない。だから佛蘭西で學校に關係する職業といへば、公教育を與へ又指圖する總べての人間、即ち大學總長より小さな村では小學教師までをも包含するのである。之に反して、階級は、社會的地位の同一水準に居る一切の人間を包含するものであつて、彼等が如何なる方面に活動してゐても敢て問はない。前の例を採るならば、大學總長は最高級の階級に屬するものであつて、大なる國家的任務を果してゐる長官達と、又政治界、知識界、經濟界の指導者達と、相並んで立つてゐるのである。然るに小學教師は、中位階級に屬するもので、彼等は其の階級中にあつて、大

部分の官公吏及び私工業の或る種の労働者達と、交際してゐるのである。最も低い階級が多く、の共通の要求を表明し、又擁護する爲に一種の狭い連帶を彼等の間に作る様になつて以來、階級による集團は今日非常に重大視されてゐる。多くの論議を惹き起した社會階級の觀念は(註一)、階級闘争の結果、今や餘程明白になつた。

註一、特に左記諸書を見よ。

Cyr. Van Overbergh, *La classe sociale.*

Arthur Bauer, *Les classes sociales.*

此れ等の集團の外に、最後に特記したい他の集團がある。それは、自由に撰まれた目的の團體に基礎を置く集團である。此の種の集團は、近代生活の複雑なる活動が惹き起した色々の利害關係から生じた諸多の社會、若しくは私的結社である。斯かる種類に屬するものとして、我々は、經濟界では商業上の諸種の會社、知識界で

は科學協會・文藝協會・藝術協會・宗教界では教會・政治界では政黨等を列擧すること  
が出来た。又集合したいといふ丈の快樂の爲には、客間や俱樂部や親睦會やが  
来た。博愛を行ふ爲には、多くの慈善協會が出現した。協力はあらゆる形式の  
下に組織され又擴大されてゐる。此の協力は、その作業を増大し又その所産を多  
様にしてゐる。人間が考へ得る最も高尚な一切の目的は、右の協力によつて一  
歩、少くとも一部分づゝ達せられるであらう。勿論、この種の運動は、夫れ自身の中  
に多くの缺點と多くの危険とを藏してゐる。然し全體から見れば、貴重な又有益  
なものである。余は信ずる、未來は此の協りに依存するであらう。

## 第十二章 社會生活

社會の成素が確定された以上、此れ等の成素の働きを見なければならぬ。然  
らば、此れ等の成素の職務は何であるか、又此れ等は如何なる作用を遂行するの  
であるか。諸多の社會現象を産み出すことこそ、即ち此れ等の成素の働きである。  
余は此處に先づ、右の諸現象、特に此れ等の現象が結び付く色々の序列を努めて列  
擧したい。而して後、此れ等の異つた序列の相互の關係を検して見たいと思ふ。

社會事象は非常に多數であり、非常に相異つて居り、又非常に複雑であるからし  
て、それ等を分類することは、餘程デリケートな又危険な仕事である。此の方面に  
關する分類の企圖は、多くの人によつて行はれ、そして最初は非常に一致を缺いて  
ゐた。然し數年以來、やつと互に接近する様になり、將に殆んど一致せんとする迄

に進んだ。だから社會現象の大範疇は、今後は確定したものと見做して考へられ得るのである。次に、社會現象を區分せん爲に用ひた主要なる多くの見解を紹介しよう。

白耳義の著名なる社會學者にしてブラッセル新大學總長たるギューイヨーム・ドゥ・グレイフは、此の種の分類に、オーギュスト・コントが言ひ出した原理を適用しやうとした(註一)。誰も知つてゐる通り、偉大なるコントは、諸科學の體系を建設する爲に、その對象の複雑性の漸増と普遍性の漸減との順序に従つて、此れ等の科學を配列した。斯くて彼は天文學的現象、物理的現象、化學的現象、生物學的現象、社會的現象を區別したのである。ドゥ・グレイフは一層深く區別した。即ち彼は、コントが自然現象の總體になしたところのこゝを、社會現象に於いて試みたのである。その結果彼は、社會現象を七つの範疇に分けた。經濟的諸現象、生殖的(即ち家族的)諸現象、藝術的諸現象、知的諸現象(宗教及び科學の二者を含む)、道德的諸現象、法律的

諸現象、政治的諸現象、即ちこれである。右の分類は或る點まで成功したものであつて、確に巧妙なものであり、又多くの材料を洩らさず保留してゐる。然しながら遺憾なこゝに、ドゥ・グレイフは餘り嚴格にオーギュスト・コントに従つて行かうとした。その爲彼は、同一系列の中に宗教と科學とを混入してゐる。こゝいふ譯は、彼が、科學を以て宗教に代稱せらるゝものとの信じ、獨特なる科學的諸研究と並んで又その外にあつて宗教が自己特有の領域を保持し得るこゝを見なかつたからである。然かのみならず、彼は、右の繼續的範疇の中に包含されてゐる諸現象の漸減的普遍性の特質を、極端に主張してゐる。彼の言ふ様な經濟的組織、知識的組織、道德的組織の意味でならば、此れ等の組織の中で勿論政治的組織が最も複雑であると言ひ得る。然し單にそれ丈で、政治的組織が他の總べての組織よりも普遍的でないと言ひ得る。附言し得る權利があるであらうか。諸多の社會集團の中で、何等の政治的組織をも有たないものが果して存するであらうか。若しある様に信ぜられるならば、其

處は家庭的組織が政治的組織に代つてゐるのではないか。實に右の場合では家庭的組織が政治的組織をなしてゐるのである。同じ様に、道德的諸現象が藝術的諸現象より一層複雑でないか、誰か確言することが出来るであらうか。以上述べた様な簡単な諸注意によつて、右の興味ある企圖の中に推測的のものがあることを知り得られると思ふ。

ドッグレーフの説は、コントの影響を受けたものである。然し又此の説は、或る程度に於いて、スペンサーの刺戟をも受けてゐる。有機體説を採る學派は、専らスペンサーの流儀に従つてゐる。此の派の言ふところは、社會生活に於いて、生物學が個體生活に於いて指摘したところの三大機能を區別するのが適當だといふのである。營養の機能、生殖の機能、關係の機能、即ちそれである。社會に於いては、營養の機能は、經濟的諸現象によつて表はされてゐる。何となれば、此の種の現象は、總べて富を目的として居り、そして此れ等の現象は、富の生産、流通、分配、消費に關係

してゐるからである。偕て、社會の富は、有機體の食料と對應するものである。勿論、この二個の要語は、社會學者や生物學者が解するよりも廣義に解してある。といふのは、富は生活の維持に役立つ總べてあるからである。生殖の機能は、ドッグレーフが生殖的諸現象と呼ぶところのものによつて表明される。此の言ひ表はし方は、恐らく嚴密に言へば生物學的のものであるから、更によく社會特有の同意語を之に代用するならば、家庭的諸現象といふべきであらう。最後に、關係の機能は、概略二種に區別することが出来る。此の機能が包含する社會的諸事象に於いて、或るものは國家の介在を含み、或るものは含んでゐない。何人も知つてゐる通り、國家のみが社會の總べてではない。國家は、單に一の政府と多くの法令によつて統一されたる社會に過ぎない。論理的に言へば、國家の外に、社會的諸關係の大部分が残存してゐる。即ち、道德的諸關係、知的諸關係、藝術的諸關係、宗教的諸關係がそれである。斯くて此れ等の諸關係は、法的諸關係及び政治的諸關係と異つた



一群を構成してゐる。政治的諸關係は一層確定した、然し一層強制的な特質を有つてゐる。有機體論者が言ふ様に、社會實體の統一の確立は、主として政治的諸關係の中に於いてなされるのである。

總べての人に採用され得る諸觀念の根柢を明にする爲に、その表明が非常に特殊なる見解、又一派の排他的特徴を有する見解を棄て去らう。その爲には、先づ我々は家庭的系列の諸現象を一種別のものとするこゝが出来来る。何となれば、家庭的諸現象の有機的基础からなされた抽象は、生物學によつて指摘されたものであつて、それ等の現象は正に道德的諸現象の範疇に入るからである。我々は家庭的諸現象を、道德的諸現象の一節と考へる。次に又我々は、經濟的諸現象が營養の生活を代表するこゝを斷念するこゝが出来来る。何となれば、かゝる提言は、經濟的諸現象の定義に何等著しいものを附加しないのみならず、又右の定義を狭少にし過ぎるからである。のみならず、正しく言へば、一切の他の社會事象と等し

く、右の諸現象は關係の生活に屬するものである。斯くの如くすれば我々は社會的諸現象の分類が非常に簡單になるこゝを認める。一方には、物質的生活の諸事象、即ち經濟的諸現象がある。他方には、心的生活の諸事象が存する。後者の中の或るものは、國家なしでも考へられる。道德的諸現象、知的諸現象、藝術的諸現象、宗教的諸現象、即ちそれである。又或るものは、國家なしには考へられず、又國家自身の本體ともなつてゐる。法律的諸現象、政治的諸現象、即ちそれである。右の様な分類は、非常に簡單である。此の分類に於ける用語は、何人も知つてゐるものであり、又何人にも理解出来るものである。此の分類が利用する區別は、常識で永い間なされてゐるものであり、又あらゆる國語に於いて通用し來つたものである。此の分類こそ、その精密さに於いて最も確な推定ではないであらうか。

余は次に、その中に社會的諸現象が配列されてゐる主な諸範疇を略述したい。

思ふ。それにはさしあたり、此れ等の諸種の範疇をその中に支へてゐる諸關係の問題から始めなければならぬ。

通例人々は此の問題を取扱ふのに、此れ等の範疇の中どれが他の諸範疇を支配するか、さういふ形で論じてゐる。そして、これに對して非常に異つた多くの解答が與へられてゐる。此れ等の解答は一般に、相反する二大思潮、即ち唯物的思想及び唯心的思潮を呼び得るもの、孰れかに關連してゐる。前者に従へば、基本的社會事象は經濟的事象である。後者に従へば、基本的社會事象は知的的事象である。前者に屬する多くの體系の中で最も有名なものは、カール・マルクスの學說である。マルクスの説くところに據れば、生活の原始的なる諸欲求の種類は、經濟的のものである。そして右の諸欲求を満足させる諸多の手段、就中生産要具の構成が、他の總べての種類、社會現象を發現させる。此れ等の手段は「土臺」であり、諸多の社會現象は「上部建築」である。マルクスを驅つて此の説をなさしめたものは、彼が採つ

て以て援助者とした生産の變遷に關する事實である。即ち古代の手生産より機械生産への變遷は、彼が實見した二國、即ち獨逸及び英國に於いて、最も多種の重大なる社會的變態を惹起したのである。右の檢證を一般化して、マルクスは彼の歴史的唯物觀に到達したのである。歴史的唯物觀を呼ばれる理由は、この説が、歴史の一切の發達は物質的原動力によつて支配される、と判斷するからである。余は此處で、此の説が狹隘なものであり、不完全なものであり、半面的のものである、とこれを少しく明にしたいと思ふ。一方生産要具の構成は、經濟的秩序をすら全々は支配してゐない。その廣大な綜合の中に於いて、マルクスの思想に一の地位を提供したドゥ・グレイフは言つてゐる、經濟的諸現象の中で社會的に原始的なる現象は寧ろ流通である。何となれば、人より人へは傳はつて行く富は眞に社會的特性を有つてゐるからである。他方、よし歴史的唯物觀に出来る文反對しないとして、經濟的秩序は社會生活の全部を支配するものではない。文學の進歩、美術の進

歩、諸科學の進歩すらも、縦し或る程度迄は經濟的進歩と關連するこはいへ、事實確に經濟的進歩の原因と非常に異つた夫れ々々特有の原因を有つてゐるのである。一例丈を舉げて見るならば、順次に發現する多くの哲學體系は、大多數それを圍繞する環境の經濟的諸條件なしに發生してゐる。故に此處では明白に、マルクスの理論は實相を説くに妥當でない様に考へられる。

右と全く反對なのはオーギュスト・コントの學說である。此の學說は、第二種の體系に屬するものと見るこが出来る。余は右を、知的事象の中に基本的社會現象を認むる説として舉げたいと思ふ。何となれば、此の點に關してコントは、歴然たる又完全なる唯心論者であるからである。彼に従へば、社會的構造の全部を支配するものは、思想、殊に抽象的知識である。彼の目からすれば、人間が宇宙の一部分であるといふ概念は、各個の社會状態を最もよく特色づけてゐる。實際誰も知つてゐる通り、彼は人類の歴史を三個の段階に分けた。神學的段階、形而上學的段

階、實理的段階、即ちこれである。又誰も知つてゐる通り、彼は第一の段階に於いて、呪物觀多神觀、一神觀なる繼起的時代を區別し、又第三の段階に於いて、特殊的知識の發達を特色とする現代即ち特殊化の時代の後に、綜合的なると同時に實理的なる一の哲學が繁榮する未來の時代即ち一般化の時代を豫見してゐた。彼は言ふ此等各個の時期に於いて、技術、政治、及び工藝を鼓舞したものは、科學及び哲學である。——右の理論の中に立派なもの、又部分的には正確なもの、存するこを、我々は喜んで認める。然しながら、余が信するこころによれば、此の理論は、コントが欲した程遠く進めるこは出来ない。余は先程、哲學が經濟に對して獨立であるこを叙べて置いた。此處で余は、技術、政治、工藝が科學に對して獨立のものであるこを言ひたい。音樂家の獨創力、政治家の獨創力、一般には農業者、實業家の獨創力すらも、物理學者の實驗室から汲み出すこは出来ない、況んや思索家の書齋からをや。眞に知的なる原動力は、社會中の總べてを支配するものではない。

然らば如何なる結論が生ずるか。曰く他の總べての種類の社會現象を從屬させる如き社會現象は決して存しない。されども此れ等多くの種類の現象の中に何等の連絡がないであらうか。何等かの様式に於いてもないであらうか。余の考では總べてが非常に密接に連結してゐると思ふ。一例を擧げて見やう。今日の戰爭は、本質的には政治的現象である。何故かといふに、戰爭は、二個若しくは數個の國家の、いや少くともそれ等各個の政府の確執から生ずるからである。然し戰爭は、同時に、經濟的方面をも有してゐる。即ち、國際市場に於ける二系列の生産者の競争となる。戰爭は又、知的方面を有する。即ち、二個の文明、二個の心狀、二個の國語の對立となる。全く無關係の様に見える事象の秩序ですらも尙ほ、互に混同してゐるこゝが分かる。右の二方面からして、人々はその交戦國民の熱情を激昂させる爲に、或は藝術に、或は宗教に、或は道徳に、或は法律に訴へる。斯の如くにして、社會現象の總べての範疇は、右の様な悲劇の中に、現はれてゐるのである。――

餘り廣大な例を採らずに、一層縮少された劇の上に目を注いで見やう。若しよいならば、重罪裁判所に於ける訴訟の場面を假定する。此の劇は、その採られた訴訟手續からすれば法律的のものであり、その基礎となつてゐる問題からすれば道徳的のものである。役者達が演じてゐる事柄の動機は、屢々經濟的秩序に屬するものである。政治的秩序も亦、屢々それに影響を及ぼしてゐる。又、端役の方面をも忽諸に附しない爲には、鑑定人と共に科學が参加し、監獄教悔師と共に宗教が参加し、審問の場面を現出させる爲に藝術も参加する。各個の場合に、諸種の秩序の一致及び相互作用があるを云へる。即ち或るときはその中の一が優勢であり、或るときは又他の一が勢力を占めてゐるのである。然し孰れをも遺却してはならぬ。いし、又全體に於いて、各々は演出に缺くべからざる役割を有つてゐるのである。然しながら、此處に必要なことは、それ等のものを一の眞に客觀的なる範圍に區分する分析である。余は、此れ等の秩序の各個が一の獨立的存在を有つ

てゐるかさうかを考査して見たいと思ふ。同じ様な理由で、余は起首に於ける此れ等の秩序の分離をも認める。余は次に方面を變へて、其れ等の中に部分的接近が行はれてゐることを檢索して見やう。けれども我々は、それを認め得る理由を有つてゐるであらうか。人々はそれに就いて、充分疑ひをはさむ餘地がある。諸範疇が客觀的實體なしに作られるといふことは、實際確に可能である。要するに人間は社會に於て行動し、そして彼等の行爲は我々が考察する方面に従つて、到る處特に經濟的に、若しくは特に道德的に、若しくは又特に政治的其他に見えるのである。然しながら根本に於いて、それは依然として又單一なる社會的のものである。余が其處に導入しやうとする區別は、我々の精神の働きである。我々の精神は其處に主觀的特質を認める、だからそれは幾らか不自然なものである。即ち精神は多くの顯著な對象の間に於ける諸關係の外的確立によつて、右の多くの區分を調和させるのである。あらゆる場合に於いて、同じく、此處で科學は、それを理解す

る爲に、實體にあつては共有なるものを細分しなければならぬのである。科學は、一を多しなし、次にそれ等を再び結びつけねばよいのである(註一)。

註一、本研究で説いた社會的諸現象の分類の中には、*L'Année sociologique* に採用されてゐる分類が掲げてない。其の理由を述べて置く。該年報には次の如き廣大な分類がなされてゐる。宗教的社會學、道德的及び法律的社會學、犯罪社會學及び道德統計學、經濟的社會學、社會形態學、雜(言語、技術、工藝)。右の様な分類には、余は大反對である。此の分類では、道德と法律とが合體し、又法律の中に政治を包含させてゐる。其の代りに、刑法と民法とが分けられてゐる。「雜なる項目下に合併されてゐる諸成分は、全く異質的のものである。然し何處にも此の表が如何なる意味から作られたかといふことを説いてない。宗教的社會學が眞先にあるが、勿論これは同年報の編者達が宗教をあらゆる文化の原始的形式と見たからであらう。然しながら此處には、宗教思想が、道德と法律との堅靱な網によつて織り込まれ、又經濟的

秩序の根によつて營養分を吸ひ込んだ莖の上に開いた花の様のものであることを忘れられてゐる。尙ほ又此處に遺却されてゐることは、社會的諸機能より前に、それ等の機能を發現さしてゐる諸構造を考察しなければならぬといふことである。これ等の構造の研究は即ち、該年報の用語を借りて言へば、社會形態學である。畢竟するに、此の分類は幾分ヒラミッドを倒にした様な外貌を有つてゐる。余は、右の分類に就いて永く論議する必要を認めない。何となれば年報の筆者達の考では、最近に刊行された多くの著述とその中に取扱はれてゐる多くの材料とを配列せん爲に、右の如き分類を便宜上拵へたのに過ぎないからである。そして又、一の叢書の多數の書物を排列する爲に採られてゐる場合には、此の種の分類にとつて自由が許されてゐる。

## 第十三章 社會進化

社會は決して不動のものではない。社會の多くの構造は、それ等構造の作用に從つて變形する。此の社會進化といふ項目に關しては、澤山の又複雑な問題が論議されてゐるのである。

第一に、社會進化の原因となるものは何であるか。社會の諸器官の働きがそれ等の器官を變形する、と言ふ丈けでは未だ々々不充分である。何故かといふに、茲に一例を舉げて見れば、一の機械の運轉はその機械を磨滅させる丈であるけれども、社會的機制體にあつては、磨滅が恢復されるのみならず、それを使用することによつて、その機械は通例完全なものとなるのである。斯かる不思議なる特性は、一體何處から生ずるのであるか。

余は、二個の原因が一致して右を釋明する、と信ずる。一は、進化の原始的動力の

性質である。他の一は、それに用ひられたる主要なる手段の性質である。

右の動力となるものは、最善を得んことを欲望である。人間は、不斷に、自己の地位を改善せんことを熱望してゐる。人間は、スピノザの定義に従へば、あらゆる生物と等しく、自己の現實を單に保持せんことをのみを目的としない。彼は、父より偉大たらんことをより向上せんことを欲してゐる。余の見るところによれば、これがあらゆる生物の種の中に於ける人間の種の特長である。

又手段となるものは、理知の發達である。他の總べての有機體と同じ様に、人間は自己の環境に應化しやうと努める。然しながら、應化せんことを此の努力は、人間にあつては非常に特殊な一面を有してゐる。この努力は、非常に急速に又非常に一般的に、心的形式を帯びて來る。動物に於いては、この努力は衝動的であり又非理想的である。然るに人間に於いては、反省的である。人間にあつては、意志は判斷方によつて指導される。それから又人間の努力は、一の全く別種なる廣大な

範圍の一の全く別種な安全を獲得する。人間に於いては、殆んど無制限ともいふべき擴大が可能とせられる様になる。各人は最早、動物に於けることは異つて、單に自己の環境の働に服従しなくなる。人間は環境に對して斷えず逆にならば、若しそれが變形するところが出来れば、却つて逆に環境を自分に都合よい様に變形するものである。

理知の多くの創造物が示す著しい効果は何かといへば、それは、附加され集積され得る特性を右の創造物が有つてゐるところである。斯くて、數世紀を經過する中に、多くの發明は繼續し、そして各個に發生して來る、といふところが分かる。人類を指導する多くの思想、人間が實踐する多くの行爲、人間が利用する多くの對象物は、右の様な工合にして不斷に擴大して行くのである。ガブリエル・タルドは、資本の性質を研究して（註一）次の如く言つてゐる。資本は我々人間の多くの繼續的發明の總和以外の何ものでもない。然しながら右の如き獨創的な定義を精確

ならしめる爲には、多くの加工されたる産出物の中に於いて、具象化されたる多くの發明が問題となつて来る。こゝを附け加へなければならぬ、でないとしても少くとも心的資本と物的資本とを區別し、この第二類の方を制限しなければならぬ。斯くて人間の種は、原理上、彼の理論上の知識の、彼の實際上の知識の、及び彼の存在並に活動の手段の寶庫を、年を経るに従つて増大して行くのである。

註一 Tarde, *Psychologie économique*.

けれども、右の原理の中に何等絶對のものがない。こゝを、我々はよく知つてゐる。余が主張せんとする規準は、非常な例外を認容してゐるに過ぎない。若し最も普通に前進なるものがあるとするも、更に又より屢々停滯及び後退がある。これは何處から來たものであるか。それは、時には精神に喰ひ入り又理知の發現を妨害する一種の麻痺状態から來る。又一層屢々餘り進んでゐない一の集團が

他のより進んだ集團の上に與へる破壊的行爲からも來る。數世紀に亘る支那文明の停滯は、當然右の第一類の原因から生じたもの、様に思はれる。紀元五世紀に於ける羅馬文明の崩壊は、第二類の原因から來てゐる。——今日も尙ほ此れ等の後退の理法は存在してゐるであらうか。人々は屢々、右の理法を表明しやうと努力したが、何れも充分に成功しなかつた様である。多くの學者は、特にテーヌは、社會の諸形式の復現に就いて叙べた。政治組織は、それを發現させた組織とは順序を逆にして崩壊して行く。即ち政治組織を形成する累積した層の中、最近のものが先づ崩壊し、最も古いものが更に後まで持續されて行くのである。思想は通例確實である。何となれば、思想は、最も基本的な最も不可缺な又最も消滅する危険の少ない文化が最初に獲得したものであるからである。然しながら右の原理は、文字通りに解するこゝは出來ない。退歩は必ずしも、諸形式を消滅させるものではない。斯くて羅馬帝國の多くの廢墟の上には、紀元前七世紀頃希臘や伊太利に



存在してゐた都市の様な小自治制都市は再現せずして、廣大なる多くの王國が建設されたのであつた。此れ等の王國は、實に近代の多くの大民族の下造りをしたものである。タルドの如きは、此の問題に關して、復現の規準に反對な一の規準をすら作り得るを信じてゐた。彼は右の規準を、不復現の原理 *le principe d'irréversibilité* と呼んだ。彼は曰く、社會は決して前の段階を再び通るものではない。進化の後退の中には、原始的状態から新らしい状態を分化する或ものが残留する。余も又右の説を承認する。然し、その後退中に或る種の多くの事及び原始的状態を偲ばせる更に多數の原始的なるものすらも發現するといふとを許容する條件の下に於いてある。畢竟するに、右に言つてゐることは種に關する問題である。だから非常に一般的な定式を主張するのは無謀極まることである。——今此處に最近のもので非常に珍しい復現の場合をのみ舉げて見やう。それは過去への故意的復歸の場合である。餘り佛蘭西には識られてゐない波蘭の社會學者達、パウルク

イゼングリューン、カシミール・ドクケッレスクラウツは、右を革命的溯古 *retrospection révolutionnaire* なる名稱の下に説明してゐる(註一)。革命に際しては、件の國は喜んで既往の政治的諸制度を採用するものである。佛蘭西革命は、羅馬共和國で採用してゐた或る種の官制を再建しやうと考へた。其の證據には、それ等の官制を作るのに、執政官、護民官、元老院等の語を用ひた。王政復古では、舊制度を復興しやうと望んだ。第二共和政は、第一共和政で用ひた名稱を、その多くの集會に與へた。第二帝政は、第一帝政を模倣しやうと努めた。斯くの如く列舉し來れば、此の見解は單に一の限られたる興味に過ぎないものとなる。然しながら右の見解は、一般化するこゝが出来、又我々はその背後に進化一般の概念を發見するこゝが出来る。

註一、Casimir de Kellès Krauz, *La lois de rétrospection révolutionnaire*, 右の研究は *Annales de l'Institut international de sociologie*, tome II, 1896, に載つてゐる。

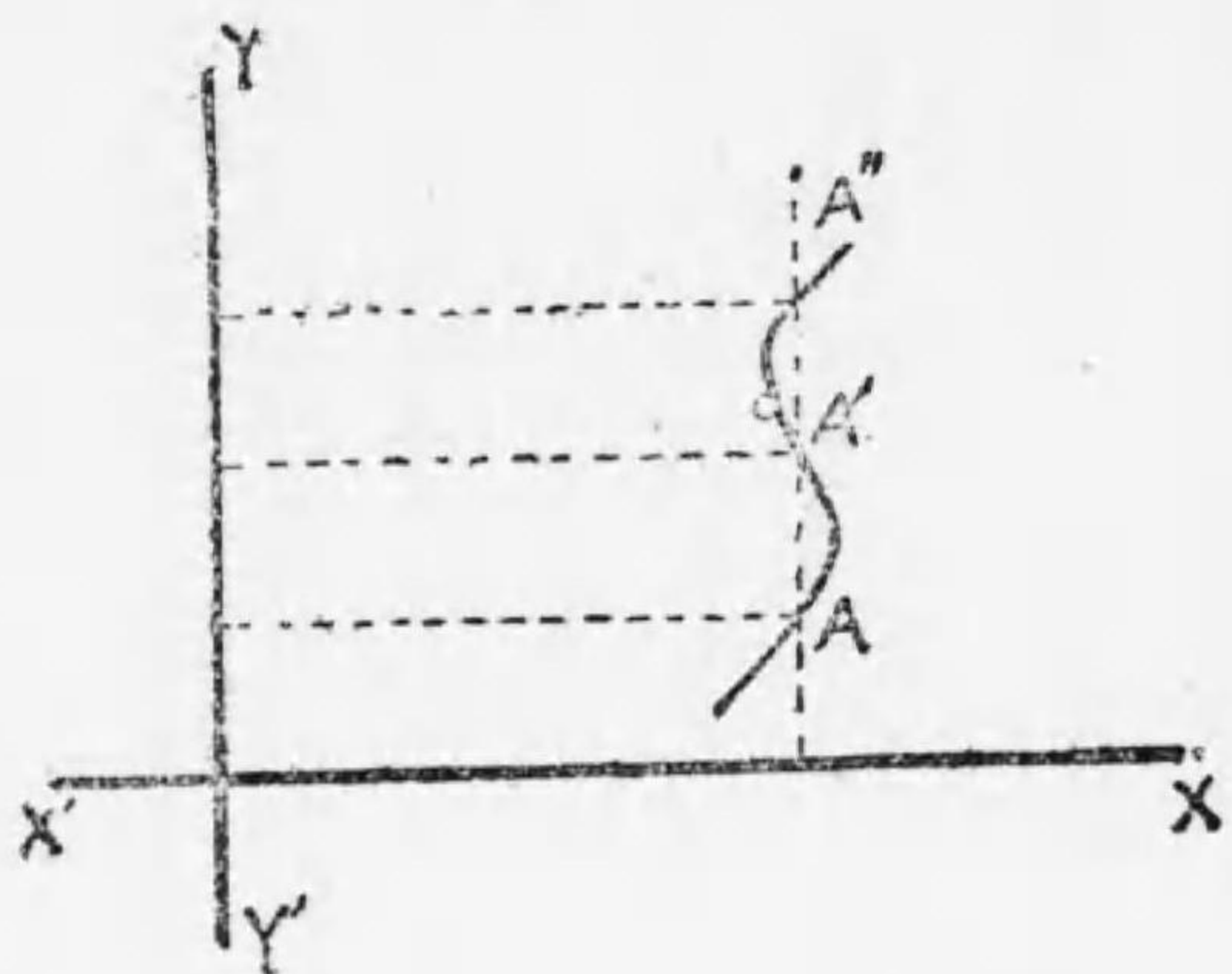
此の見解は、人類の歴史の中に、嘗つて消滅した諸多の形式に對する週期的復歸を見るものである。此の見地は、社會學者達によつて色々異つた方面から採られてゐる。必要であるから左に列擧して見やう。オーギュスト・コントは彼の師たるアンリ・サンシモンに從つて、次の様に言つてゐる。二種の時期の間に交代が生ずる。彼は、その一種を組織的時期と呼び、他を批判的時期と命名した。第一種の時期に於いては、社會の型が出来上り、第二種の時期に於いては、その型が壊される。中世は一の組織的時期であつた。ルネッサンスから佛蘭西革命までは、一の批判的時期が続いた。現代は一の新らしい組織が創造されてゐるのである。——同様にハーバート・スペンサーは一の理法を説いてゐる。その理法は、彼が律動的理法と名づけたものであつて、社會界を遙に超越して全宇宙を支配するものである。此の原理に從へば、進化と崩壞、若しくは又統整と無統整とは交互に行はれる。即ち運動の消失と共に物質の集中が行はれ、次に物質の分散と共に運動の吸収が行

はれるのである。之はオーギュスト・コントの説と殆んど近いものであつて、只他の言を以てしたのみ、又社會力學を物理力學に結びつける様な多くの用語を選まない様に警戒したみに過ぎないのである。

右二説の兩者の中では、歴史の進程は幾らか對をなしてゐる。他の異つた大思想家ヘーゲルに從へば、右の歴史の進程は三個の型を採る。即ち正、反、合は無窮に繼續して行くのである。これ歴史の理法であり、自然の理法であり、又限りなき論理の理法である。社會に於いても、矢張り右に於けると同じ方向をこつて交代が行はれる。一の制度が樹立される、これ正である。然し多くの不平が起つてそれを覆さうとし、反對者は終に優越者となる、これ反である。次に前の状態に賛成する者は再び元氣を回復して、或る種の満足を得、斯くして混合したる一制度を樹立する、これ合である。此の合は、三者を包含した新らしい進化の出發點となるのである。我々は、社會の領域中に右の三個の行程を明にすることが出来る。それは

次の如く呼ばれる。動、反動、和解、即ちこれである。右に就いて我々は一の好例を、佛蘭西が経過し來つたこの中に發見するこゝが出来る。即ち約一世紀前に、第一帝政、王政復古、七月帝政と續いて行はれたのがそれである。

何人にも分かる通り、ヘーゲルの體系中に於いては、合がそれに先行する二段階よりも進歩を示してゐる。然しながらオーギュスト・コントの觀念に於いても又同様である。彼の考ふるところに従へば、各個の新らしい組織的時期は、前の組織的時期に比較するならば、中間に立つ批判的時期の多くの貢獻によつて利益を得てゐるのである。ハーバート・スペンサーの觀念に於いても又同様である。此れ等の體系に共通なる觀念の面白い表明が、最近に没した佛蘭西の社會學者ラウール・ドゥ・ラグラツスリーの進化形式の圖解と題せる研究に於いて發表された、彼はヴ・キコによつて嘗てなされた考へ、HICORI 即ち自然の自然自身に對する週期的復歸の考へを支持するものであるが、然し彼は更にそれに進化の觀念を結合して



る。彼に従へば、進化は、世人が好んで許容するが如く直線的に行はれるものではない。進化は又、ヴ・キコが可成り速斷的なる考の中に定めた様に圓の形を採るものでもない。進化は寧ろ螺旋狀の形を採つて行はれるものである（上表を見よ）。螺旋の各回轉に應じて、人類は新しい點 A' A'' に達する。A' A'' は原初の點 A と同一直線上にあるが、然しより高い水平線上にある。間隔中に表はされてゐるものは、正に反この働き、組織と批判との働き、又統整と無統整との働きである。結果は合であつて、動搖及び部分的後退があるにも拘らず、一種の前進を示

してゐる。

以上叙べ來つた總べての理論は、一の重要な價值を有つてゐるもの、様に考へられる。それ等は孰れも歴史上の多くの例に根據を置いてゐる。故に孰れも眞理の一部分を包含してゐるのである。然し余の見るところによれば、これも全體の眞理を表明せるものにしては受取られない。人類の進化は非常に複雑な又非常に雑多なものであるからして、一の簡單なる定式で以て説明することは不可能である。人類の進化は、到る處に於いて又常に同じ様な規準に従つて仕遂げられるものではない。諸多の時、諸多の場所、諸多の制度との間に於いて、悉く區別されなければならない。その考察の時期に準じて、研究された國に應じて、その發達を觀察せんとする事象の種類に従つて、我々は、既知の諸規準では説明し得ない歴史の諸多の新方面が現出するのを見る。けれども前に述べた諸定式が無用のものであると言ふ譯ではない。反對に、我々は一層社會に關する研究を進め、又

一層澤山の場合を検證する機會を有してゐる。それ等の定式の或ものは、一の顯著な形で以て、右の場合に適用されるのである。然し總べてを説明するに不充分なる此れ等の定式は、どれも總べてを摘約することすら不可能である。右に挙げた總べての定式の外に、その何れにも入らない多くの場合をも考慮に入れなければならぬし、又未だ認められてゐない人々、未だ知られてゐない人々の主張をも保留して置かなければならない。

右に述べた總べての中で、一點だけは確實である。それは、進化が必ずしも進歩を意味しないといふことである。進化といふ語は、元來中性の意味の語であつて、檢證された過程の性質に何等の價值判斷を附さない。進歩といふ語は之に反して賞揚的な性質を賦與されてゐる。けれども此處でよく識つて置かなければならないのは、多數の場合に於いて、成就された進化に斯かる性質を賦與し得ざることである。單に多くの進歩が、必ずしも停滯及び退歩の時期から切り離すことが

出來ないのみならず、此れ等の進歩が地方的且つ部分的のものに過ぎないといふことを附言して置かなければならない。一民族の進歩を効果するものは——勝利例へば外交上の勝利、産業上の勝利——他のもの、後退を惹起する。同一民族中に於いても、或る方面の進歩は他の方面の退歩を随伴することがある。斯くて軍事組織に於ける進歩は、尙武的風習及び隔世遺傳的殘忍の方向に向つて退化することがある。進歩の諸種の形式は必ずしも相互を連帶するものではない。當然最も重要な即ち道德的進化が知的進化及び物質的進化と密接に結びついてゐるか否うかを知ることはすら疑問である。余は自己の立場よりして、文化の進歩は原理上道德の完成に役立つものである、と信じてゐる。然しながら、此處に看却してはならぬ事は、右の規準には多數の又重要な例外の存することがある。

右の外進化なる語に關連する最後の問題がある。總べての價值判斷は必然的に主觀的である。進歩に性質を賦與することも同様に主觀的のものである。余

は進歩を我々の理想に向つての社會の進動である、と言ひたい。然し此の理想は全く個人的のものであるが、一體誰が我々に理想の根據を保證するのであるか。理想が遭遇するところの澤山の反對を見るべき、我々は理想に就て疑問を起す。理想は、事實各人に於いて異つてゐる。各人は又、殆んゞ一切の事柄に關して異つた斷判を下してゐる。故に、或る者には進歩と見えることも、或る者には退歩と思はれるのである。例へば政治上の事柄に於いても、一の政黨が優秀なことであり又進歩的であることと判斷することとを、他の多くの政黨は不祥のことと又退歩的のこととであることと評價してゐる。——如何にして此の困難を避くべきか。然しこれを完全に檢索することは、明に此處で研究することの範圍外に屬する。然しながら、只言ひ得ることは、人類運動の先頭に立つ諸民族間に一般に認められる諸多の主義を進化の標準として採用することが論理上當然であるといふことである。故に、人間の種の大多數に多くの物質的満足を保證する様な進化を、進歩であること考へる

ここが正しいと思ふ。又退歩的であるを考へられるのは、極く一般に望まれてゐる此れ等の幸福を減ずる様な進化である。此れ等の標準自身が不確實若しくは曖昧に見える場合には、社會學者に唯一の規準が與へられ得る。その規準は、檢證された多くの出來事に總べて性質を賦ずることを止めるにある。社會學者は叙述文に制限される、決して判斷してはならないのである。これが嚴密に科學的な態度である。けれども、何時も觀察し得るか否うかは疑問である。それ文に自己を制限する社會學者は、進歩なる名を唱へることを嚴格に避けねばならない。社會學者には、進化といふ術語文で充分である。

## 第十四章 社會學的方法

前數章に於いて、社會學が取扱ふ諸問題を叙べて置いた。社會學は未だ、それ等の問題を確に解決してはゐない。しかする爲には、社會學はまだまだ年月を經過してゐない。然し終に、此の學は活潑に右の目的に向つて進んで來た。然らば此の學は、如何にしてそれを成就するのであるか。又如何なる道途に従つて行くのであるか。一言を以て言へば、社會學の方法は如何なるものであるか。

それを説明する爲に、余は、屢々人々が混同する三個の事柄を區別したい。いや寧ろ、一語で以て、三系列の學科に關して余が本書の初めに試みた區別を想起して欲しい。三系列とは、實體の特殊の諸方面を檢究する特殊の社會諸科學、實體から最も一般的なる諸原理を抽出す社會學、諸物の現狀を改良することに没頭する社會的諸技術である。此れ等三系列の各々は、その特有の性質によつて定められ

たる自己の方法を有つてゐる。

(一)——先づ第一に、特殊的社會諸科學に關するものを見やう。後に到つて整頓しやうと思ふ一層完全な表は此處では保留して置いて、その中から例として、民勢學、土俗學、經濟學、風俗史又は風俗學、宗教史又は宗教學等を引用して見たい。

右に引用したものが孰れも自己の方法として特色づけてゐるものは、その方法が本質的に歸納的であるといふことである。此の方法は、諸理法の發見をなす爲に、諸事象の檢證から出發する。その檢證に要する繼續的の多くの手段は次の如きものである。

先づ最初に來るものは、所謂觀察である。目前に生起する諸事象を處理する際には、科學者はそれ等の事象を直接に檢證することが出来る。政治經濟學及び社會經濟學は、その目的の爲に、非常に有益なる種々の手順を記述した。それは第一

に統計的手順であるが、この手順は觀察に數字上の精密を賦與してゐる。次に特殊研究的手順である。これは、前の手順に反對な多くの利益と不便とを有つてゐる。即ち、これは一點を探究するが、全般に亘つてゐない。これは、非常に深く這入つて行くが、然し普遍性を缺いてゐる。此の手順によつて爲される草案は可成り力強いものであるが、然し範圍が狭い。最後に擧ぐべきは、詮査の手順である。これは、或る程度迄特殊研究と統計とを結びけたものであつて、従つて各々のよい方面を採用せんとするのである。

然しながら、目前に生起しない諸事象に關しては、科學者はそれを處理するのに、此れ等の手段の孰れをも用ふることが出来ない。學者は最早、彼れ自身では諸多の檢證を行ふことが出来ないのである。彼はさうしても、それ等の檢證を他から借り來らねばならない、然しそれには、其處に指示されてゐる證據を吟味して見る必要がある。此處に二種の場合がある。一は、空間上隔つて居り、そして直接に審

査するこゝが嚴密に言へば可能なる社會的諸現象であり、他は特に時間を經過してゐる爲にそれを審査するこゝが不可能なる社會的現象である。右の孰れの場合に於いても人々は充分精確な記録を出来る丈け蒐集しやうと努める。右の一つは、人間に關する諸記録である。第一の場合では旅行者の物語、第二の場合では古人に關する物語がそれである。他の一つは、非人的諸記録である。それは諸多の社會が自己自ら残し來つた形跡であつて、記念物、住居、衣服、器具、武器、裝飾品等これである。此れ等の物的記録は人々の物語以上に役に立つこゝが屢々ある。こゝいふのは、右の記録は少くも我々に對して潤色されない限り偽る危険のないものだからである。こゝはいへ此れ等二種の記録は共に、一層綿密な批判の對象とならねばならぬし、又それ等將來の解釋は未だ未だあらゆる種類の困難に取巻かれてゐる。諸多の證左を利用する此れ等の手順の總體は、間接觀察と稱ふこゝの出來るものである。

直接觀察及び間接觀察以外に人々は屢々實驗と稱ふこゝをも數へてゐる。然しながら余は、其の爲に却つて混雜を生じはしないかと思ふ。實驗は、諸多の社會的技術に於ては非常に有利なものである。このこゝはすぐ後に説く積りである。然し之に反して社會的諸科學に於ては、役に立たない様に思はれる。實驗するといふこゝは事實に於いて精密に檢證する爲に一の事象をそれ自ら生ずるこゝである。然るに社會的資料にあつては、これはあまり感心するこゝの出來ない過程である。何故かといふに、社會組織は非常に重大な又貴重なものであるからして、結果を見んとして單一にそれを變ずるこゝは出來ない。改良するといふ見地からならば、斯かる變更をなし遂げるこゝは出來る。然し、單なる好奇心を満足させる目的ではいけない。右の様な理由からして、社會的技術には實驗は許されるが、社會的科學には許されてないのである(註一)。

註一、尙ほ附言しておきたいこゝは、學者は通例最も有利な諸經驗を許さ



れる公共の勢力を處理しないのであるから、社會的科學の爲す實驗が無益に終る恐れを有するまいふことである。

一度觀察によつて採り集められた諸事象は、取纏められなければならない。その爲には、その間に新らしい諸多の手順が導入される。分類、原因探究、歸納、理法の確立、即ちそれである。

右の諸手順の中、分類に關しては餘り深入りしたくない。何故かといふに、社會的材料に關する右の諸手順は全く他の材料に關するものだからである。此處でまた問題となることは、それ等の間で差別よりも一層多くの類似を示してゐるころの、そして又同時に他の總べての生體若しくは事象よりもより多くそれ等の間に類似を提供するころの諸生體若しくは諸事象を比較するころである。そして到る處に於いて、諸特質を計量するよりも寧ろ吟味するころの方がよいのである。

である。即ち特に、一の原本的重要を有つてゐるそして又優力なる諸特質を賦し得るころのものに注意するのである。何となれば、それ等は他の多くのもの、原因を考へられるからである。

斯くて我々は因果律の問題へ入り込んで行く。此の問題は、社會的諸科學に於いては、物理的諸科學に於いてと同じ様な色彩を帯びてゐない。寧ろ有機的諸科學に於けると同じ様な外貌を示してゐる。所謂物理學に於いて一の現象が他の現象の原因であると呼ばれる時には、一定の方法によつて前者が後者よりも先に出現し次に後者を生ずるときである。例へば、水への加熱は其の沸騰の原因である。然しながら生物界に來るとき最早同一ではない。生物界に於いては、原因及び結果は、屢々同時に發現する。のみならず、自己の後に他の現象を惹き起こすころの一現象は、後には右の惹き起こされた現象の影響をも受ける。言はゞ原因と結果が相互的なのである。各個の器官とその機能との諸關係の中に、右の例は幾ら

でも見出される。一の筋肉の構造はその働きを説明する。然し此の働きが又右の構造の理由ともなつてゐる。又若し構造の不完全が働きを妨害するならば、働きを妨害する故障は、逆に構造を悪化させるとなるのである。他の多くの例は、諸種の器官相互の間、諸種の機能相互間に於いて見られる。一の有機體は、一の全き調和であつて、その中であつて各部分は他の各個に影響を及ぼしてゐるのである。右の様な理由によつて、該有機體の神經組織及び消化機關は、不斷の相關關係にあるのである。總べて神經作用を妨害するものは、その反動として消化を妨害するのであるが、逆に消化を妨害するものは又神經作用を害することになる。——この事は、社會界に於いても同一である。只異なるところは、社會界では、有機界に於けるよりも諸構造及び諸機能が一層複雑であり、それ等の間の作用と反作用が同様に一層複雑なる丈である。一の社會に於いては、政治的生活、道徳的生活、知的生活及び經濟的生活が不斷に滲透し、そしてそれ等の諸機關即ち作業を確保する諸體が

相互の上に一の間斷なき壓力を働かしてゐる。誰でも知つてゐる様に、鐵道の布設及び發展は特に經濟上の利益の爲である。然し、それは又思想の撒布及び民主的制度の確立の爲にも役に立つてゐる。そして又此の後の方の諸現象は、却つて經濟組織を進化させてゐる。これ即ち、社會運動學から抽き出された一例である。右の例は、諸現象の繼起以上に、原因及び結果の變換を示すものである。然し此れ等の事柄を、今社會學の見地から考察して見やう。一定の時と場所とに於いて、例へば今日の佛蘭西に於いては、三個の事柄が共在してゐる。一は完全なる鐵道網、一は強烈なる思想上の運動、一は民主的制度即ちこれであるが、それ等の各々は或程度まで他の二者の原因となつてゐる。右の事實によつて、諸多の原因と結果が同一時に出現させる相互性の特質を理解することが出来る。——斯くて、社會界及び有機界に於ける原因の觀念が、物理界に於けるそれ如何に異つてゐるかといふことが明になつた。或る人々は右の差異を餘りに重大視した結果、同一の語で以

て斯くの如く異つてゐる二物を指示することを不合理と考へ、そして原因といふ用語を社會の範圍から驅逐しやうと主張した。斯くて、原因といふ語に機能といふ語を置き換へたのである。最早人々は社會的諸現象の二類が因果の諸關係を有つてゐることははずに、只單に各々機能が異つてゐるをいつてゐるのである。――余は又余の立場よりして、餘りに深く追求して今まで用られて來た學語の中に斯かる擾亂を導入する迄の必要はないと信じてゐる。余は單に社會界に於いても有機界に於いても同じく、二類の異つた關係が考へられ、そしてその各々の中で因果關係を見出すことが出来る、と言ひ度いのである。その一は共在的諸關係であり、他の一は繼起的諸關係である。前者にあつては關係せる諸現象の中の一つが優力の様に見られ得る。然し從屬的なる諸現象は最も屢々右の優力なる一現象に反對の影響を與へ、そして却つて此の現象に對して部分的貢獻をなしてゐるのである。後者に於いては、先在の現象は後發の現象の原因であると言はれ得る。

然し通例若し斯くの如く言ふことが出来ることすれば、此の最後のものは間もなく返報する。即ち、その先在現象に對して反對に作用し、そして少くとも部分的には後の原因となるのである。――社會界に於いては此の原因探究の問題が非常にデリケートな問題であるといふことは充分に言ひ得る。狹隘な又半面的な諸多の肯定を支持することの失敗に終るべきは、明かに會得出来ることである。研究者は、或る現象の眞の原因を發見し得たなき、自負することには殆んど出來ない。複雑な社會界にあつては、それは第一に多數の原因が同一の結果を生ずる爲に殆んど不斷に一致してゐることによるものである。それから又、余が述べた通り、一の原因とその他の結果とが屢々それ等の特質を顛倒してゐることにも歸因してゐる。――右の既述のここからして、こゝに一の實際上の規準が流出する。誰も知つてゐる通り、諸多原因の發見の爲には四箇の方法がある。これはジョン・スチュアー・トミルが區別したものであつて、彼はその各個に次の如く命名した。一致法、差異

法、共變法、剩餘法、即ちそれである。右の中一致法、差異法、剩餘法の三つは、社會的材料に適用するには餘り有效なものではない。何故かといふに、充分に完全な方法でもつて諸事象を分離し、そしてそれ等諸事象の中に完全なる一致と反對とを識別することは、仲々出来ることではないからである。只第三の共變法は、貴重な役を演ずることが出来る。互に機能を異にする事象の諸系列を實際に示して呉れるものは、即ちこの共變法である。殊に統計學には、此の方法が應用されてゐる。例へば佛蘭西では、時間空間に於いて出生の減少と貯蓄の増加とを惹き起こす二系列の並行を指摘することが出来、又右の二つの事象の第二が第一に對して決定的な一の影響を及ぼしたことを誰でも考へられたのである。其處に又、民勢學者達によつて明かに採用された様に思はれる一の結論がある(註一)。故に、ジョン・スチュアート・ミルが彼の論理學體系に記載した諸手順の中少くも一つは、社會的方面から言へば、非常に重要なものとして殘留する譯である。

註一 J.-V. Talquist, Recherches statistiques sur la tendance à une moindre fécondité des mariages. 1886.

Arsène Dumont, Dépopulation et civilisation, 1890.

Dr. Jacques Bertillon, La dépopulation en France, 1911.

Paul Leroy-Beaulieu, La question de la population, 2e édition, 1913.

René Worms, Natalité et régime successoral, 1917.

因果關係が発見された以上、それ等を概括することが必要である。此の作用は即ち歸納なる名稱を賦せられてゐるものである。如何なる材料を取扱ふにしても、慎重な態度を以てしなければならぬといふことは分りきつたことである。然し社會的材料を取扱ふに際しては、特に此の點を警戒することが必要である。一度正確に定められた一の關係は、論理上一の一般的眞理に照らして眞なるものでなければならぬ。一の原因は常にその結果を生じ、諸現象の一の結合は常に

存續する。然し、最初研究された場合に働かなかつた原因が、實際、新らしい場合に介在するこゝにはある、即ち最初の場合に注意されなかつた諸現象が後の場合に現はれて來るこゝにはある。斯かる際には前にした豫見が顯される譯である。これは單に、豫期された結果が實際に生じなかつたに過ぎない。此のこゝは、此の場合に初めて働き出した諸多の原動力の一層明かな結果によつて、僅に變裝されたに過ぎないのである。それは總べて、社會界の複雑多岐によるものである。だから社會界に關しては、歸納によつて主張され得る諸多の理法は、極端な用心で以て立てられねばならない。そして又これ等の理法を作る時には、それ等に一の普遍的價値を賦與しない様警戒しなければならない。斯くの如く形容言に性質を賦するこゝは分を超へたこゝである。我々は單に此れ等の諸理法が一の一般的効力を有つてゐるこゝいへばよいのである。右の如く一層讓歩的な特性を賦與するならば、我々は經驗の否認に對して警戒するこゝが出来る。即ち我々は、常に思

ふ通りに未來を保留するのである。

諸多の社會的理法の中に、當然二種の範疇を認めるこゝが出来、共在の諸理法及び繼起の諸理法がそれである。右は自明のこゝである、こゝいふ譯は、理法は一般化された因果關係であり、又此れ等の關係は前記の區分を認容するからである。然しながら余は、此處で、右の第一種の理法に關するものに一言を附加したいと思ふ。人々が今日その歴史を考へてゐる科學的方法是、諸多の社會組織を或る數の一般的類型に配列するこゝを許容した。それ等は、古代ギリシヤ・ラティン都市の類型、中世紀都會の類型、現代歐洲國家の類型である。又アラビヤ部落の類型、及び銅色人種の部落の類型もさうである。此れ等各個の類型の特質は何であるか。或る數丈の特色が共在してゐるが、その或るものは經濟的組織に屬し、他の或るものは家庭的組織に屬し、又他の或るものは道德的・宗教的・知的・政治的、其他の組織に屬してゐる。此れ等の特色は相互に結合してゐて相互に推測され誘引されるの

であるから、それ等の中の一つを發見するならば總べてを見出すことになるのである。類型は正に右の多くの特色の結合から生ずるのである。従つて、類型の成立は共在の理法に據つてゐる。だからして、諸類型の發見を以て社會的諸科學の特殊の課業の對象とする必要はない。諸類型の發見は、余が前に列挙しておいた諸手順の中に入るべきものである。即ち歸納の一形式なのである。

けれども、歸納に關しては、言ふべきことは多くない。最後に残つた叙すべき手順は、演繹である。實際、時々此の手順は社會的諸科學の中に地位を占むることを非難されてゐる。其理由は次の如きものであるらしい。最も速に又最も完全に作り上げられた社會的學科の一たる經濟學は、屢々殆んご極端にまで演繹の手順を採用した。その濫用は、リカルド及カール・マルクスの如き學者に於いて最も明白である。之に對して反動の生ずるのは、當然のことである。此の反動は演繹的方法の採用に反抗し歸納的方法に據る形式の下に行はれた。歴史派經濟學者達

は勇敢に此の分野を切り開いて、部分的の勝利を収めた。一種の境界劃定は、今日最も普通に、二種の方法の範圍に關して認められてゐる。即ち、演繹は社會的技術に残されたのである。この手順が社會的技術に於いて當然基本的職分を盡してゐることに關しては、すぐ後に述ぶる積りである。又、科學は歸納に適當なる分野である。一般に言はれてゐる。——然し以上の説は、余の考ふるところでは、全々精確であるとは言はれない。社會的諸科學に於いては、歸納的方法なる名稱の下に包括される諸手順、觀察、分類、原因の發見、狹義の歸納は言ふまでもなく主要なものである。然しながら、歸納が一度なされ、ば、そこから適法に演繹することが出来る。一の一般的原理が一の承認されたる歸納によつて確然と定められ、ば、我々は其處から演繹的に諸多の歸結を引出し、そして科學の中に於いてそれ等の歸結に頼ることが出来るのである。——そればかりではない。歸納的研究の集合體の中に於いてすらも、或る種の演繹が介在してゐる。何となれば、演繹は根本に於い

ては、最も慣用的なる推理の方式であるからである。推理とは確定したる諸命題から多くの論理的歸結を引出すものである。然るに、斯かる推理は人々が不斷に役立て、あるものである。だから、誰がその使用を止めやうなご、ご欲しやう。演繹を除去すれば、精神は去勢されたも同様である。更に適切に言ふならば、精神を無能力のものにして仕舞ふのである。科學をして、諸事象の直接論證によつて批判されない様な演繹を使用せしめないごいふごは全く正しいごである。我々は、無理をせずには、科學が決して演繹の援を借りないなご、主張するごは出来ないであらう。

(二) — 前に叙た總べての説明は、特殊的社會諸科學の方法に關したものである。然し余には、一般社會學は右の諸多の社會科學とは別物である。社會學はそれ等の科學と並置さるべきものではなくて、それらの綜合である。社會學は右の綜合

からその諸要素を抽き取る、然しそれ等の諸要素で以て自己獨特の仕事を作るのである。だから此れ等の科學が如何なる手順によるかごいふごを示すのが必要だつたのである。斯くして初めて、社會學がその材料を取扱ふ仕方を解説し得るのである。然しながら、社會學が如何にして自己の構成を證明するかごいふごを叙べて置かなければならない。

社會學は、比較の働きによつて、それをなしてゐる様に思はれる。社會學は種々の社會的科學が獲得した最も一般的なる諸結果を檢査する。次に、それ等の結果を比較し、相互に相關せしめ、そして合同する。余が既に述べて置いた通り、社會學の職分は事實に於いて、社會實體の種々の方面を接觸させるごである。それ等の方面の各個は、即ち各個の特殊的社會科學の範圍に入るべきものである。社會學は又、自己を構成する爲に、心理學の多くの材料及び社會學より前に成立する他の二箇の一般的科學即ち生物學と宇宙論との材料をも利用する。社會學は斯く

て、社會界全體に關する諸理法を發見せんことに努め、そして若し出來得るならばそれ等の理法を生物界に關する諸理法及び物理界に關する諸理法に結びつけるのである。余が此處に與へた表示は少し簡單過ぎる様に思はれる。然し、余が次章に於いて、社會學が今から作る主要な諸理法に就いて述べる際には、右の諸表示は精確に知られること、思ふ。此處では、余は社會學の本質的過程が整頓であるといふことを言ふに止めたい。

(三)——最後に残つたものは、社會的諸技術の方法である。余は之を僅少な語で説明したいと思ふ。余の考ふるところによれば、此れ等の技術は、社會的行爲を組織立て、又改良せんことをするのである。これが、右の諸技術の手順である。各々の技術は、先づ、あらゆる行爲を支配すべき優越なる一の理想を作る。例へば、經濟的技術は、幸福を普及すること、その理想とし、道德的技術は、善の支配若しくは義務

の支配を理想とするが如きこれである。次に技術は此の理想を實體と比較して自己が作成しなければならぬ法則を判斷する。斯くて、「行爲の三段論法」も呼ぶべきものが出来る。理想が與へられ(大前提)、その理想が實在の中に發見する多くの障礙が與へられ(小前提)、此處に出来る丈それに服従する爲に従ふべき規範が出来るのである(結論)。誰にも見られる通り、此處で技術は演繹によつて働くのである。略言すれば、科學は特殊から一般に上る傾きがあるのに、技術は一般から特殊へ下るのである。

然しながら技術は、諸多の三段論法の結論を諸事象の試験に従はしめる。若し實際が右の結論に不都合であるときは、技術はその結論を拋棄する。いや寧ろそれによつて正しくする。故に技術は、その諸過程の最終の段階に於いて實驗を採用するのである。實驗は、政治的技術の爲には非常に力説された(註二)しかし、又此れは、經濟的技術及び道德的技術にも矢張り有利なものである。余は此處



では、社會的技術の方法に關して詳しく述ぶることは出来ない。こいふのは、技術は本書の取扱ふべき主題でないからである。此處で述べた理由は、實驗及び演繹が技術に於ては科學に於いてよりもより一層重大な役目を演じてゐるこいふことを一言で説明したかつたからである(註一)。

註一、 Léon Donnat はその著 *La politique expérimentale* の中で立法者がその採用する法文を、先づ特定の時期にのみ適用し(一時的立法)若しくは特定の地域にのみ適用し(個別的立法)若しくは又その適用を地方權に委任し(任意的立法)、その結果原因の一層完全な知識を得てそれ等の法文を改訂し完成し若しくは廢棄するのであるが、右の如くするならば立法者はそれ等の法文の價値を如何に明にすることが出来るかこいふことを指摘してゐる。

註二、本章に取扱つた諸原理を詳細に知らんと欲するならば、余の *Philosophie des sciences sociales* の第二卷となつてゐる *Méthode des sciences sociales* を参照せられたい。

## 第十五章 社會學の理法

社會學は、社會的諸科目の綜合であるから、社會界に關する最も高遠なる諸理法を發見しなければならぬ。社會學は既に斯くの如き理法を發見し又確立したであらうか。然し斯の學に對して過大な要求をすることは、髓に無理である、何となれば斯の學が出来てから未だ幾干にもならないのであるから。けれども、單なる期望以上のものを作成することを勿論もう要求することは出来る。故に、今迄社會學が作り上げた財産の總目錄を作成して見やう。

社會的諸理法は、三類に區別される。それは、余が曩に説明した三種の見解に屬するものである(註一)。此處では簡單化する爲に、靜學の見解、動學の見解、運動學の見解を呼びたい。

註一、第十章参照。

靜學は、共在の諸理法を確定する。此の種の一の理法は、一の社會的類型を特色づける。余は此の點に關して、可成り詳細に説明して置いた(註一)。だから此處では、今日認められてゐる社會的類型を舉述すれば充分である。茲に重要點が存するのである。一方に於いて、西洋史が我々に示すところによれば、古代ギリシヤ・ローマには、第一にジェノス及びジエンスの類型、第二に都市の類型、第三に都市の類型があつた。初めの二個の類型は多數の例で示される。然し第三の類型には唯一つの雛型しかない。羅馬帝國の時代になつては、未開部族が場面に入つて來たが、此れ等の部族は非常に異つた一の類型に屬するものである。此れ等の部族が帝國を互壞した、いや寧ろ兩者が混同した結果、そこに新規な多くの社會形式が構成されることになつた。即ち我々の知つてゐる通り、五六世紀には城砦及び領地、十一世紀には市町村等の團體、十五世紀には近代の國家が發現したのである。――

他方には、非常に異つた多くの土地に關する諸探究が、今日我々の思想を擴大した。斯くて、社會學に光明を與ふるものは、最早歐羅巴史ではなくなつて土俗學になつて仕舞つた。それと共に人々は、アラビヤ人の諸部族やベルベール人の諸部族の研究を始めたのである。其の結果知り得たところのこゝを、聖書によつてイスラエル人の諸部族に結びつけて見た。又、支那の都市、安南の村落、蒙古の部落等に就いても記述された。斯くて、歐洲から餘程離れた土地にある諸多の社會形式も明かに知られる様になつた。それ等の社會形式の中で最初に知られたのは、亞米利加印度人の諸部落の類型である。次に認められたのは、濠太利人の諸部族の類型である。人々は又、中央亞弗利加の部族の諸類型、特にバンツ族の諸類型を確定せんとしてゐる。――前述二種の研究の特色を明にする爲に、各々の方面に於いて綜合を企てた二人の著名な學者の名を擧げることが出来る。古代及び中世紀の研究では、フステルド・クランジュ(註二)。歐羅巴以外の種族團體の研究では、リ

ウス・モルガン(註三)、の二人がそれである。最後に大膽なる探究者達が今日此れ等種々の材料を利用して又有史以前の考古學や動物學すらの提供する材料を使用して人類の一いや寧ろ數多の原本的類型を復造せんとする努力を認めることはよい。然し斯かる企ては早計に斷言してはいけない、少くとも其處迄達するには未だ々々距離があるのである。

註一、第十四章参照。

註二、Fustel de Coulanges, La cité antique. Histoire des institutions politiques de l'ancienne France.

註三、モルガンの諸著は、Frédéric Engels, Origines de la famille, de la propriété privée et de l'état. の中に要約されてゐる。

次に動學的諸理法に就いて述べて見やう。若し此の動學的といふ形容詞をその眞の意義に解するならば、即ちオーギュスト・コントが常に用ひてゐたのミ異つ

た意義に解するならば、動學的諸理法とは、諸多の社會活力の働きを支配する諸理法である。これは、諸多社會の生理學的諸理法であると言ふことが出来る。此れ等の諸理法の第一のものは、他の總べての理法を支配するものである。それは即ち、較小行爲の理法若しくは最小努力の理法である。故に此の理法は、人間若しくは集團が出来たる丈最小の努力若しくは最小の費消を以て一の結果を收めんとする。若しくは又、人間若しくは集團が一定の努力若しくは費消で以て出来る丈優秀なる結果を收めんとするものであると言ひ得る(註一)。此の理法の著しい點は、單に社會界に於いて眞なるのみならず、又有機界及び既に物理界に於いても眞なることである。何人も事實容易に此の理法に關連して認めることの出来るのは、最小抵抗の原理といふ力學上の原理である。此の理法が社會界に於いて著しい點は、それが心理的特質を探ることである。事實社會界に於ける右の理法の應用は、意識的のものであり又意志的のものである。亞米利加の社會學者レスクローウ

下に從へば、此の理法は社會界では「經濟の理法」なる。この經濟の理法は、單に特に經濟的活動を支配するのみならず、又人間活動の一切の形式を支配するものである。——次には直ちに、ガブリエル・タルドによつて唱導された「模倣の理法」を擧げるこゝが出来る。此の理法によつて考へられるこゝは、社會が合致する過程が社會の成員相互の模倣であるといふこゝである。タルドに從へば、此の過程に關する諸理法は二ある。模倣は、先づ一方的であり、次に相互的なる(即ち、劣者が優者を眞似、すつと後になつて又優者が劣者を眞似る)。又模倣は内部的から外部的なる(即ち人々は、先づその模型の精神を探り、後にその形式を探る)。此處では深く立入つて論じやうとは思はぬ。只、タルドが彼以前に看却されてゐた諸事象に注意を拂つたこゝ、彼の研究に可成りの精確さを導入しやうとしたこゝ、それによつて彼の著述を獨創的且つ暗示的のものとしたこゝ等を認めて置けばよいのである。

註一、然しながら勿論、極小の努力で以て人間が極大の結果を獲得しやうとする」と言つてはならない、何となれば、斯かる定式は何等決定の要素とはならないからである。

先に引用したベルギーの社會學者ギョーム・ドゥ・グレーフは、面白い一種の頭韻法及び同音法によつて、時々彼特有の體系をタルドの理論に結論して見た。此の新らしい體系の中心となつてゐるものは「限界の理法」である。此の新體系に從へば、社會界に於いて、總べての行爲はその範圍を強制的に制限されてゐる。此の最後のものゝみを探るならば、産業上の製産物は到る處に普及しない、いはんや宗教の教義の如きは勿論である。又、法律の法典は一國若しくは多くも數國の中に於いてしか認容されない。又、最も偉大なる征服者も、全地球を打ち從へるこゝは出来ない譯である。此れ即ち、諸多の自治制諸多の獨創力諸多の雜多性

の保護者である。此の限界の理法は、模倣の諸理法に平衡なる或る種のもの、中にも役に立つといふのは、此の限界の理法が模倣の諸理法の働きの無限に放散するこゝを妨害するからである。余は自己の立場よりして、限界の理法が少くとも模倣の諸理法と同じ丈の眞理を含んでゐるこゝを躊躇せずして認める。

茲で一の注意をしておく必要がある。前述の種々の理法は、動學的諸理法と其の他の社會的諸理法との間に於ける一種の過渡を形成してゐる。限界の理法は、諸多の社會活力の働きを規定し、そしてその働きを制肘してゐる。故にこの理法は、諸多の社會活力を平衡にすることに目的とし、それによつて一部分靜學的なる特質を有つてゐる。之に反して、模倣の諸理法は、一種の變遷的活力の諸理法である。此れ等の理法はそれ自身特有の叙述の中に於いて、諸程の繼起即ち一種の進化の觀念を包含してゐるものである。即ち既に運動學的の或るものを有つてゐるのである。

今や所謂運動學的諸理法を説明すべき順となつた。此の理法は、當然進化の諸理法である。これは二類に區分される。一類は諸構造の進化に關するものであり、他の一類は諸機能の進化に關するものである。

社會學に關する諸理法の中で最も著名なるもので斯學全體を建設したこゝも言はるべき理法、即ちオーギュスト・コントの三段階の理法は、右の機能の進化に關するものである。誰も知つてゐる通り、コントに従へば、人類は心理上三大段階を經由し來たのである。即ち三大段階とは、神學的段階、呪物觀、多神觀、一神觀、形而上學的段階、實理的段階、特殊化の時代、一般化の時代がそれである。心的狀態の此れ等の諸形式の各個に、政治組織の一形式が對應してゐる。即ち、神學的段階に於いては、權力は武士に歸屬し、形而上學的段階に於いては、法學者に歸屬し、實理的段階に於いては、學者に歸屬してゐた。又右の心的狀態の各個形式に、一の産業形式及び

一の藝術形式が對應してゐたのである。——右の理論の中には、隨に一の偉大なる卓見が表明されてゐる。只論議の的となるのは、此の理論が一の精密なる原理、即ち人類が實理的智識の支配を受ける様な一の状態に向つて進んでゐるさういふ原理から出發してゐるさういふ事柄である。然し余は既に彼の立てた他の一原理に對して保留をせねばならなかつた。即ちその原理さういふのは、知的要素が他の一切の社會的要素よりも優越な地位を占めてゐる、さういふのであつた(註一)。加之知的要素それ自身の進化に關してすらも、余は、オーギュスト・コントの見たま全々同一には諸物を見ない。彼以後、社會學は多くの進歩を遂げた。だから、今日に於いては、彼が殆んど識り得なかつた多くの要素をも計量しなければならぬ。即ちそれは、歴史の始源及び歴史以前に關する諸研究である。コントによれば、神學的段階は想像の時代であつた、形而上學的段階は推理の時代であつた、又科學的段階は實驗の時代である。けれども、右に言つて置いた諸研究は、想像の優越が總べて

の中で必ずしも最も原始的なものでないことを指示した。想像なる性能が發達した前に、人類が粗雑な感覺しか有つてゐなかつた時期でないさうしても、精々初等の記憶によつて整へられた多くの知覺しか有つてゐなかつた時期があつたのである。此の期にあつては、アムステルダム大學土俗學教授スタインメツツの言を借りて言へば、人間は今では見るこゝの出來ない様な唯物論者であつたのである。想像の發達は右の原初的狀態に比すれば一大進歩であつて、神學は實に知的進化の既に進んだ一形式さうして現出したのである。だか、若しオーギュスト・コントの三段區分を保持せんさうならば、少くともそれに重大なる訂正を加へなければならぬであらう。形而上學的段階は僅に過渡的のものに過ぎないものであつて、その前後に接する二段階が基礎となつてゐたのである。然し總べての段階の中で最も存続した原始的段階が獨立の地位を占めてゐた爲に、右の如く一の段階さうして説明し得るのである。人類は、一切の思索が嚴密に具象的なる一の原始的時

期から出發して來てゐる、人類は次に、抽象へ進み、その爲め却つて過つて非常に閉ぢ込められた。今日では、再び具象的となつたが、然しその具象は抽象に於いてなされた多くの心的習慣の益を受けたものである。人類は、感覺から想像及び推理を経過した、同時に此れ等の總べての過程を利用する完全なる智識へ到達せんとしてゐる(註二)。

註一、 第十二章参照。

註二、 然しながら、オーギュスト・コントの、觀念をどうしても支持しなければならぬといふ必要は毫もない。優れた學者達は他のものを示してゐる。かくてルイ・ウエバーはその近著 *Le rythme du progrès* に於いて、コントの三段階の理法に一の理法を置換せんことを唱導してゐる。その理法は「二段階の理法」といふのであるが、これは、進歩が思索の秩序に於いて行はれる諸時期と進歩が物質的活動の秩序に於いて作用する諸時期との習慣的交替に基礎を置いてゐるものである。

オーギュスト・コントの名に次いで最も偉大であり且その社會學が尊敬に値するは、ハーバート・スペンサーの名である。此の思索家も亦、社會的諸機能に關する一般的理法を作つた。彼に従へば、人類は漸次武力主義から産業主義へ進んでゐる。厥初に於いては、或る種の群は勞働によつて生活してゐる、然し他の群は右の群から掠奪しその群に損をさせて生活してゐる。遙に後に至つては、諸物が整頓し、そして終には諸群は彼等特有の勞働によつて生活することになる。掠奪的活動は、到る處に於いて漸次創造的活動に地位を讓る。勿論、最近の諸多の事件は、武力主義が産業主義と相並んで發達してゐることを示し又従つて右の理法を早計に一般化することを妨害してゐる爲に、無慚にも該理法を否定してゐる様ではあるけれども、余は尙ほ此の理法には支持すべき多くのものがあるを信じてゐる。然し、此の理法がハーバート・スペンサーにのみ特有のものでなからざることを注意して

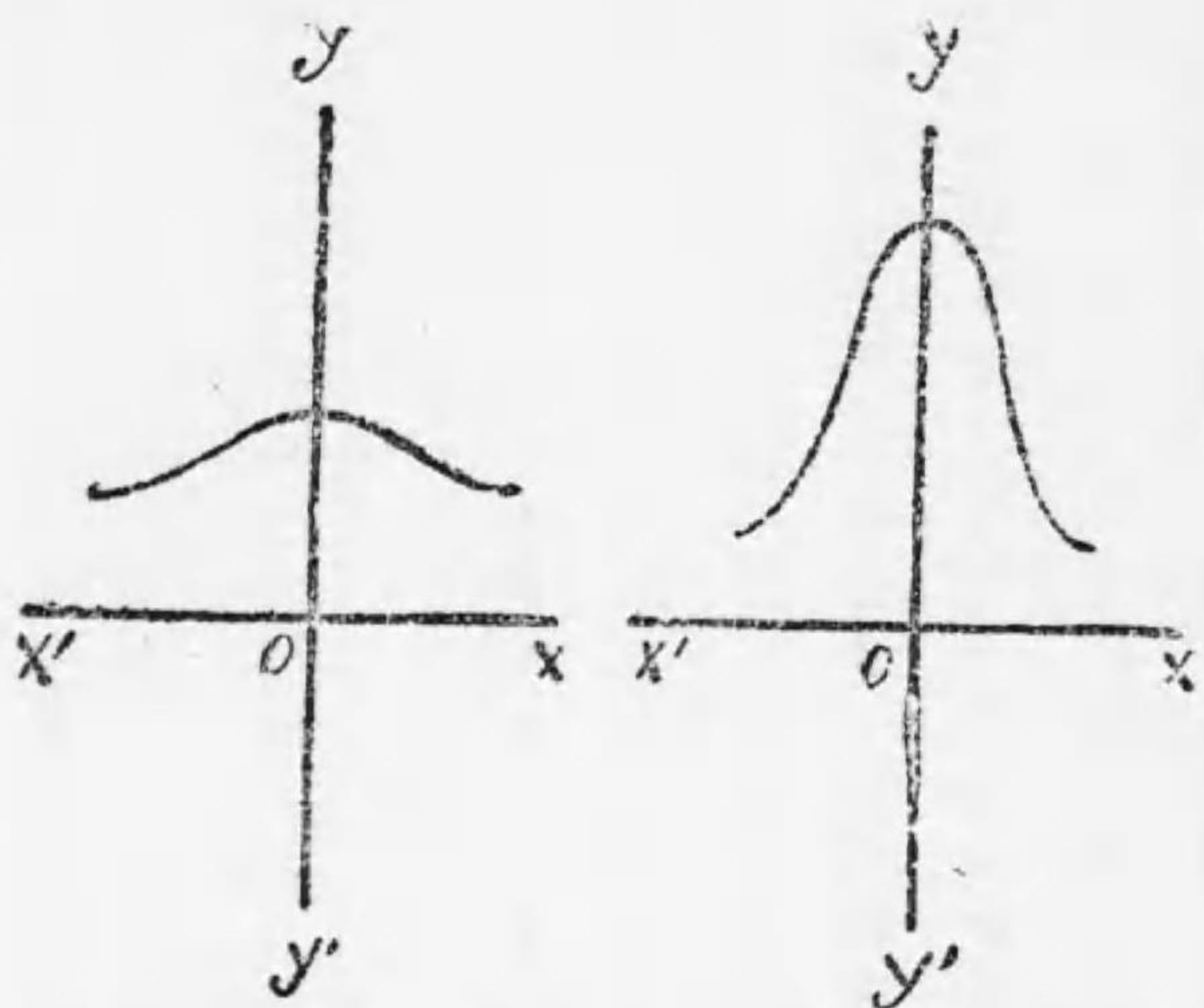
置きたい。既にコントは、社會的優越が武人から産業家に移るこいふ事實を指摘してゐた。又光榮ある貴族の出たるアンリドゥ・サンシモンは、コント以前に既に右の事實に注目してゐたのである。——他の方面に於いては、著名なる法制史家サール・ヘンリー・サムナー・メーンが同じ様な見解を一層適切な法制上の形式の下に述べてゐる。彼の言ふところによれば、進化は人類を身分の制度から契約の制度へ導いてゐる。前者は政府が權威によつて身分づける制度であり、後者は人民が彼等の自由な了解によつてのみ支配されたいと欲する制度である。けれども、前者は武力の支配を豫想するものであり、後者は産業の平和的組織に一致するものである。だから、メーンの説は、彼の同國人たるスペンサーの説と合致してゐる。——最後に注意すべきは、右の二者が共に、今日有名な佛蘭西の經濟學者イーズ・ギョイヨの説に影響を與へてゐることである。彼の定式に従へば、歴史の繼續中に於いて人間は同類者を利用することを利用して自然を利用する様になつた。

ハーバート・スペンサーは、進化に關する第二の理法を説いてゐる。彼からすれば、此の理法は前掲の理法と同程度に重要なものである。此理法は、諸機能の進化と共に諸構造の進化をも説明するものである。これは、我々をして、諸構造の進化に關する諸理法を説明させる。此れ等の諸理法は、恐らく總べての中で最も深く諸物の真相にまで滲透してゐるものであらう。スペンサーの此の第二の理法は、次の如き定式で表明し得る。即ち、進化は混沌たる同質から整然たる異質に進む、こいふのである。彼の考ふるところによれば、右は自然の普遍的理法の一である。此の理法は、物理界に於いては、星雲が惑星へ變形して行くことを特色づけてゐる。生物界では、無定形の胚から分化した有機體をなすに至る發達を支配してゐる。社會界では、同じ様に、相似よつた成員からなつてゐるを、そして何等確定せる支配もなき原始的人群を、各個人が著しい特性を有つてゐる然し無數の關係が各個人を種々の人間に結びつける近代國家に導くものである。余は信ずる、右の定式



よりも深奥な定式は録りない。實に如何なる定式も此の定式程諸事象を包攝してゐるものはないのである。——以上の如く見來つて、余は、右の理法がソクラテス及びプラトン以後哲學の取扱つて來た最も高遠な問題の一に解決を與へた様に思ふ。その問題といふのは、一多の調和の問題である。此の理法が事實に於いて示すところは、あらゆる生物に於いて統一と多様とが同時に増大するといふことであつて、其の點よりして此の二者の反對は單なる外見に過ぎないといふことを許容させる。何となれば、右の二者は同時的發達の一理法に従つてゐるからである。

スペンサーより前に、恐らく彼程有名ではないが、然し卓越した一學者は、社會的構造の進化の爲に、他の一定式を作つた。それはオーギュスト・コントと同時代人たるアドルフ・ケトレであるが、彼は科學的統計の創始者である。彼は著名なる人間の諸性能の發達に關する論文註一、といふ研究に於いて、諸多の人間集團が一



致するといふことを、進化の事象によつて説明した。それ等の集團の諸成員間に於ける體力・富・智識・權能等の差異は減少する。民族の中心となるべき部分は一層濃密となり、異常な諸個人は一層稀少となる。そして特定の一集團に於いて、平均的類型 *le type moyen* は確立し、又不斷に層一層と勢力を占めることとなるのである。——ケトレは右の定式に關して一の圖表を作つた。彼は諸集團を代表させる爲に一の「鐘形の線」を以てしたが、その線の中心を占むるものが平均人であり、兩端を構成するものが例外人である。彼は言

ふ、時の經つに連れて中心は上昇し、兩端は低下し又互に接近してくる、(前頁表を見よ)。——此れ等の見解はクールノの思想に可成りの影響を與へた、又クールノを通してタルドの思想に影響を與へた様である。

現代獨逸の社會學者でキール大學哲學教授たるフェルジナンド・テンニースは、獨逸で著名な人々(註一)の間で信用を博した彼の思想を約述した(註二)。余は彼の學説を保持すべき價值あるものとして、此處に説明して見たいと思ふ。彼は犠牲社會 *la communauté* と利益社會 *société* とを嚴密に分離してゐる。犠牲社會の名の下に彼が數へてゐるものは、閉塞的集團の諸形式であつて、例へば家内の家族、教會、國家の如きものである。利益社會なる名の下に彼が理解してゐるものは、人間的大家族即ち *societas humani generis* である。彼に従へば、進化は、狭い犠牲社會から一層大きな犠牲社會への推移の中に、及び所謂利益社會の進歩的構成中に存するのである。現世紀に於いてすら彼の故國が、彼によつて豫見せられ又祈願せられ

た最後の進化的段階の到來を阻止したことは、前述の如き見解を持する穩當な學者をして如何に遺憾に思はしめることであらう。

註一、此の點に關しては Gaston Richard, *La sociologie*. を見よ。

註二、彼の著 *Gemeinschaft und Gesellschaft*. を見よ。

愈々余の説を述べべき段取となつたが、若し此れ等のデリケートな材料に關して余自身の考を主張することを許さるゝならば、簡約して次の如く叙べたいと思ふ。社會的諸構成の中に、聯立的にして且つ外見反對なる然しながら實質上相互に結合し且つ補償的なる二箇の運動が生ずる。一方の運動によつては、諸多の集團は擴大する。他方の運動によつては、分割される。蠻人侵入後の近代世界を考へて見やう。最初の社會的諸單位は小さなものであつた。それ等の單位は、各個の首長の領地に、狭く制限されてゐた。然し、或は争鬭によつて、或は婚姻によつて、

或は又相續によつて、此れ等の單位は増大し、そして同一の首長が數箇の領地の頭首となつた。伯領、公領等は斯くの如くして出來たのである。次に、王權は漸次總べての此れ等の領土を包含して、確實な一國家が成立するに至つた。いや寧ろ歐羅巴に於いて十個ばかりの國家が成立したのである。然し運動はそれ丈に止まらない。十六世紀以後、商業は國際的になつて來た。嘗つて宗教的諸思想がなした様に、多くの科學的及び哲學的思想は、國境を突破した。種々の國々の法典は、相互に準據するこゝとなつた。風俗は、互に一致する様になつた。文字や藝術は、或人が言つた如く(註一)、「一の共通部分の諸多の連鎖をそれ等に培養する人々の間に於いて確立する」様になつた。故に一種の歐羅巴的單位が創造された譯である、これ即ちオーギュスト・コントが西洋共和國と呼んだころのものである。而して、右西洋共和國の諸主義の光が亞米利加の上に輝き、次に漸時他の諸大陸の上に輝くに至つて、我々は人類的單位發現を見得るのである。然し勿論、多くの後退も

あり得る。残念ながら現時に於いて實際存してゐる。これは丁度古代に於いても、同種の一の進化の所産たる羅馬帝國が蠻人の侵入によつて崩壞した時に顯著な後退があつたのと同じものである。然しながら終に運動は勃然として起り、總べての人々が最早や茲に停滯すべきにあらざるこゝ、多くの抵抗を征服し得べきこゝ、又何時かはその事業の完成すべきこゝを信する様になつてゐる。——けれどもそれと同時に、人々はそれに就いて全く異つた他の一事を認めてゐる。それは、成立した諸多の大民族の内部に於いて、多くの分割が行はれてゐるこゝである。新しい諸原理によつて、或は職業に、或は階級に、或は諸多の「選ばれたる親和力」に即ちあらゆる種類の無數の私的協同の淵源に従ひ、非常に異つた多くの集團が造られてゐる。かくて、一般社會が擴大するに連れて、それは又多數の特殊社會に分割されるのである(註二)。右の過程は社會の繼起的諸段階を表はす一系の形態によつて、圖表的に指示され得る。第一の段階に於いては、小さな多數の獨立せる集團

があつて、その各個は一の閉塞的社會(一の領地)を代表する。次の段階にそれ等の小集團の數は減少し、より大なる多くの社會(伯領)に合併される。第三段階には、それ等の中の若干(國家)しかなくなる。けれども第二段階に於いて既に、各個の社會集團の内部に若干の從屬的小集團が出現し、そして最後の段階に於いてはその數が非常に多くなるこゝを見られる。——故に約言すれば、多數の社會的構造の進化は、二個の主流に歸結するこゝが出来る様に考へられる。その一は、多數の集團の數を減じ、從つて結合するものである。他の一は、右の數を増し、從つて變化するものである。其處には何等の矛盾がない。何となれば、第二の主流が発生させる諸單位は、第一の主流が除去する諸單位と同一類のものではないからである。故に此の場合も尙ほ、統一と多樣とは同時に増大すると言ふこゝが出来るのである。

註一、此の言は、グレアール講師 Gréard が、ソルボンヌに於いて外國學生の爲になした講義の中からとつたものである。

註二、尙ほ我々は、特殊的諸有機體の増大に關しても類似の一の理法を見出すことが出来るであらう。

畢竟するに、以上に叙べたものは社會學が提供した理法の若干である。此處で言ひ得るこゝは、總べての理法は確立はしたが、何れも完全にではない、といふこゝである。然し總べての理法はその基底に多くの事象を有つてゐる、即ち充分に一般的なる一の範圍を有つてゐる様に思はれる。此れ等の理法が、縦し今日まで非常に聯結せる一體を形成しないといへ、決して相互相反してゐるものではない。以上を考慮に入れて見るならば、恐らく社會學は未だ成立してゐない、こゝしても少くも建築中である、といふこゝを考へられ得ると思ふ。